万世大路事業誌『中野新道記･山地部編』現代語訳

――栗子隧道（福島側）から板揚橋（旧中野村･大笹生村境界）、川子坂まで――

万世大路研究会（大滝会）
鹿摩貞男

『中野新道記』は、開通式（明治 14 年〔1881 年〕10 月 3 日）を間近に控えた中野新道の明治期のルポルタージュ記事である。中野新道とは、のちに万世大路（旧国道 13 号）と称することとなった福島～米沢間に新設された道路の内福島県において施工した区間のことをいう。すなわち中野新道の起点は、当時の信夫郡福島町通り十一丁目･里程元標（現福島市上町・道路元標）、終点は旧栗子隧道福島側でその延長は約 30 キロメートルである。ルポは、終点側の栗子隧道（福島側）から始められ、福島の起点側へ向って進み全線について格調高い文語体で報告されている。

本稿では、全線でなくその内の栗子隧道から旧中野村と旧大笹生村の境界に架かる板揚橋（1 級河川摺上川右支川小川に架橋）・川子坂までの山地部区間（中野新道の約 3 分の 2〔21 キロメートル程〕）について、現代語訳を試みたのである（抄訳）。

（『中野新道記』: 原本名称は、『万世大路事業誌』所収の「雑記之部」である。）

序に代えて　～『中野新道記』と『萬世大路事業誌』について～

別添参考資料で紹介する『萬世大路事業誌』に所収されている「雑記之部」（筆者により**『中野新道記』**と命名）では、筆者にとっては難解な明治の文語体によって新装なった中野新道の詳細な状況が報告されている。原本はしかも達筆の手書きである（**別紙資料－2 参照**）。使用されている漢字や言葉使いには見たことも聞いたことも無いものが少なくなく、正直のところ浅学非才にして素養なき筆者には残念ながら歯が立たないところが多くある。今回は、『福島県直轄国道改修史』（建設省福島工事事務所編）に転載されている活字版（**別紙資料－1 参照**）を底本として現代語への訳出を試みたものである。

当該『中野新道記』（「雑記之部」）は、万世大路関係者の中ではつとに知られている史料であり、筆者にとっても最も重要な文献のひとつである。当文書に報告されている万世大路の初期の情報は外には得がたいもので、その全文を現代語で正確に把握したいというのはかねてからの望みであり、各所部分的に現代語訳を試み参考にしていたものである。何れの日にか、どなたかに現代語訳を提供していただけるのではないかとお待ちしていたが、残念ながら今日まで目にしていない。結局自分でやるしかないものと諦めて今回抄訳ではあるけれども、身の程知らずにも全体的系統的に訳出してみたというわけである。当然誤謬もあると思われるし、明解な解読ができず筆者の勝手な推測に基づくところもあって力量不足を痛感しているところである。

巻末には、本稿の基となっている下記の各種資料についても添付しておいたので参照されたい。

なお、本稿では冒頭でおことわりしているが、中野新道全体ではなく板揚橋までの訳出であり抄訳とする所以である。川子坂以降起点までの**『平地部編』**（約 9ｋｍ分）についは別の機会に報告したいと思う。

『中野新道記』(旧称「雑記之部」)について

『中野新道記』は、福島縣土木課編『萬世大路事業誌』（明治 14 年 9 月）に所収されている文献（「雑記之部」）で、ほぼ完成した中野新道（のちの万世大路･旧国道 13 号で福島県施工分）の状況を伝えるルポルタージュ記事である。単なるルポでなく、難工事となった箇所の解説などを加え、当時の道路事情や近隣の状況を良く描写していると思われ、初代万世大路を知る上で貴重な現地報告書である。本ルポの筆者名等は詳らかでないが、内容から推察するに本工事に深く関与し、中野新道の調査計画・工事内容等を知悉し精通している人物と考えられる。

栗子新道（のち万世大路）のうち福島県側の施工分すなわち「中野新道」は、終点となる栗子隧道福島側坑口から約 109 メートル（1 町）きたところから、起点となる当時の信夫郡福島町通り十一丁目･里程元標（のち福島市上町・福島市道路元標／現大原綜合病院新棟前西側の市道交差点）までの約 30 キロメートルで、当ルポでは栗子隧道（山形県施工）の福島側の状況から報告を始めている。

これの書かれた時期は明記されていないけれども、明治 14 年〔1881 年〕10 月の開通前であることは確かで、文面から推測すると開通間近の 7 月頃ではないかと推測される。開通日 10 月 3 日の明治天皇ご通輦（つうれん）（お通りになること）に先立ち、内務省等の先発官が中野新道を 9 月 1 日に視察しているが二ツ小屋隧道はまだ工事中で車（馬車）が通れる状態ではないと報告している（山形県編『山形県史資料篇二　明治初期下　三島文書』196 頁)。また、菅原白龍画集「栗子隧道十二景（栗嶺奇観（りつれいきかん））」（明治 14 年 7 月画）の二ツ小屋隧道（米沢側）の絵画でもまだ工事中になっていて飯場（仮廠（かりしょう））らしきものが描かれている。また「栗子新道画圖」（浜崎木麟画　明治 4 年 9 月）の二ツ小屋隧道福島側坑口の絵でも土木課出張所と共に作業員宿舎（飯場）らしきものが描かれている。

因みに栗子新道（万世大路）のうち山形県施工分は「刈安新道」と称し、山形県側の起点（万世大路終点）は当時の南置賜郡米沢今町相生橋（現米沢市相生町）で、終点は前記栗子隧道前の福島県との工区境で延長は約 19 キロメートルである。

この「刈安新道」と「中野新道」を合わせて栗子新道と称していたが、明治 15 年〔1882 年〕2 月「万世大路」の名称を明治天皇から賜ったものである。

なお、開通に先立つ明治 14 年 9 月 28 日に先発官の松方正義内務卿（長官、のち内閣総理大臣）が視察に来られた時にはさすがにすべて完成していたということである（前掲書)。

ところで、このルポ記事は、原本では「雑記之部」という見出しで掲載されていて特に題名は付いていないがなにかと不便であり、事業誌の中でも最も重要な文献の一つと筆者は考えているので、文書の中身を端的に示すと思われる**『中野新道記･山地部編』**（略称中野新道ルポ）と表記（仮称）させて頂いた。本稿では板揚橋（旧中野村・大笹生村の境界）までの山地部相当地域を扱う。

『萬世大路事業誌』について(『福島県直轄国道改修史』(編集者 星 菊助氏))

福島縣土木課編『萬世大路（朱書旧名中野新道）事業誌』（明治 14 年 9 月、以下『万世大路事業誌』と表記）とは、中野新道建設に関する文書類を取り纏めて編集した書物である。

これについては、**『福島県直轄国道改修史』**と共に下記**「別添参考資料」**として若干の解説資料を添

付したので参照されたい.

本文【巻末資料について】

・別添付図　『福島縣下中野新道御通輦沿道地圖』（明治 14 年〔1881 年〕）。全体図（巻末）・部分図（本文、一部加筆）（福島県立図書館蔵　転載許可取得済）。

本図は、明治 14 年 10 月 3 日、栗子隧道米沢口でおこなわれた栗子新道（のち明治 15 年 2 月、明治天皇により万世大路と命名）の開通式に臨まれた明治天皇が、東京への帰路、中野新道を当日の行在所福島まで御通輦された事を記念して出版されたものであろう。途中の御小休所 4 箇所が記載されている（二ツ小屋〔福島県土木課出張所〕、大滝〔渡辺要七宅〕、円部〔渡辺勇吉宅〕、大笹生村〔菅野六郎兵衛宅〕）。

・別紙資料－1『中野新道記』**【**『福島県直轄国道改修史』「中野新道雑記」**（「雑記之部」活字版）】**

※『福島県直轄国道改修史』〔建設省福島工事事務所、昭和 40 年 3 月〕所収「中野新道雑記」（『萬世大路事業誌』雑記之部活字版）から転載、一部加筆。中野新道全線分収録。

・別紙資料－2『中野新道記』**【**『萬世大路事業誌』**「雑記之部」原本】**

※『萬世大路事業誌』所収「雑記之部」（本稿名称『中野新道記』）手書き原本（接写）を転載したもの。中野新道全線分録。

・別紙資料－3「従（より）福島町元標　至栗子隧道口　新道高低実測圖」（原本接写、一部加筆）『萬世大路事業誌』所収「雑記之部」（本稿名称『中野新道記』）付図。中野新道全線分収録。

【別添参考資料】

『萬世大路事業誌』及び『福島県直轄国道改修史』（編集者　星　菊助氏）について

○『萬世大路事業誌』について

・別紙資料　『萬世大路事業誌』原本（接写）抄録

※『萬世大路事業誌』の表紙・凡例・目次・新道大意之部一部（工種別工事状況〔隧道部内訳書・橋梁部内訳書〕）・会計ノ部一部（土工表）の原本を転載（接写）したもの。

○『福島県直轄国道改修史』（編集者　星菊助氏）　について

（※『萬世大路事業誌』〔明治･大正期の県庁文書資料番号 1961〕福島県歴史資料館所蔵　転載許可取得済）

万世大路事業誌『中野新道記･山地部編』現代語訳

――栗子隧道（福島側）から板揚橋（旧中野村･大笹生村境界）、川子坂まで――

凡例

(1) 原本は、漢字カタカナ交じりの文語体書かれた（手書き）もので、初めから終わりまで一続きで、句読点は勿論段落等も一切ないものである（**別紙資料－2 参照**）。訳出に当たっては、筆者の考え方に基づき適宜のセクションに分け小見出しを付した。また、段落、句読点、ルビも筆者による。（ ）内は、語句の注釈・注記又は原文にない補足語句である。旧字体は原則として新字体（常用漢字）を用いた。〔 〕内は原文を示しルビは筆者による。

(2) 当現代語訳の底本としたのは『福島県直轄国道改修史』（建設省東北地方建設局福島工事事務所編昭和 40 年 3 月）所収「中野新道雑記」（原本名「雑記之部」）の活字版である（**別紙資料－1**）。なお、使用に当たっては、原本である『萬世大路事業誌』（〔明治･大正期の県庁文書資料番号 1961〕福島県歴史資料館所蔵）所収「雑記之部」（**別紙資料－2**）と照合をおこない明らかな転記ミス・誤植等について筆者の独断により修正した。

(3) 本稿理解の一助として中野新道平面図（部分図）を配した。当図は、『福島縣下中野新道御通輦沿道地圖』（明治 14 年〔1881 年〕）からの引用である（一部加筆）。（福島県立図書館蔵　転載許可取得済）（**別添付図及び本稿所載部分図＝沿道地図と表記**）

(4)「雑記之部」の付図と思われる「從（より）福島町元標　至栗子隧道口　新道高低実測圖」（縦断図）については、原本を接写（一部整正加筆）したものを**別紙資料－3** に示した。

【中野新道記・山地部編　本文】

1. 栗子隧道（福島側）～烏川橋

栗子隧道（福島側）

沿道地図部分図-1　栗子隧道（福島側）～烏川橋。
（『福島縣下中野新道御通輦沿道地圖』から引用部分図一部加筆
福島県立図書館蔵、以下( )内表示省略）

栗子隧道は、山形県羽前国南置賜郡上山上村（現米沢市万世町刈安）と福島県岩代国伊達郡茂庭村（現福島市飯坂町中野）との官地に山形県において工事を実施したところである。西北（山形側坑口）から東南（福島側坑口）に向って貫通している。延長は870m〔八町〕強、山形側坑口から430m〔四町〕ほどのところが山形・福島県境である。福島県側に出ると、東側に建物〔臚舎〕が並んでいて、山形県の監督職員〔董督スルモノ〕が詰める出張所である。その近くには作業員〔工業役夫〕用の宿舎（飯場）〔仮廠〕がある。

栗子隧道（福島側）～杭甲橋

（隧道の福島側では）坑口から出て109メート〔壱町〕強の道路部についても山形県側で施工した。（この区間は）隧道の掘削工事で生じたズリ（土石類）〔石片〕の捨場〔棄擲シタル地〕としたものである。ここが福島県と山形県との工区境〔就工ノ分境〕となり、その東南側が我が福島県の施工分〔工業ニ係ル所〕である。

（その工区境から）後ろを振り返って（栗子隧道側）を見ると〔後ヘヲ観望スレハ〕、大きい山が見えるが西側を小杭甲、東側を大杭甲といい併せて杭甲嶽と呼び付近では屈指の高山である。（この辺りは）鬱蒼（翁鬱）とした森林のために獣類の巣窟となっていて、毎年猟師の好い狩場となっていて獲物の多いところである。気候は常に寒冷なので山の頂上付近では（大きく）成長する木は少ない。

ここから杭甲橋〔小杭甲橋〕までは、だんだんに下り坂となってカーブ〔屈曲〕が連続する。（新道の）左側には杭甲沢がありこれに杭甲橋（延長L=18.2m、幅W=5.5m）が架設されている。

杭甲橋～大平・大平峠～烏川橋

ここ（杭甲橋）からはやや平坦であるけれどもカーブしながら下って行くと、すぐ眼前に（高い）山が現れる。これを天宝山といい鍋を伏せたような〔覆釜ノ如く〕形をしていて広葉樹〔闊葉樹〕

が最も多い。杭甲沢はまためぐって〔遶リテ〕きてここに出てくる。水源は、杭甲嶽に発して（濫觴シテ）、北から南へ流れて烏川に入り、摺上川にそそいで阿武隈川〔逢隈川〕に合流する。ここに大平橋（L=36.4m、W=5.5m）が架かっている。

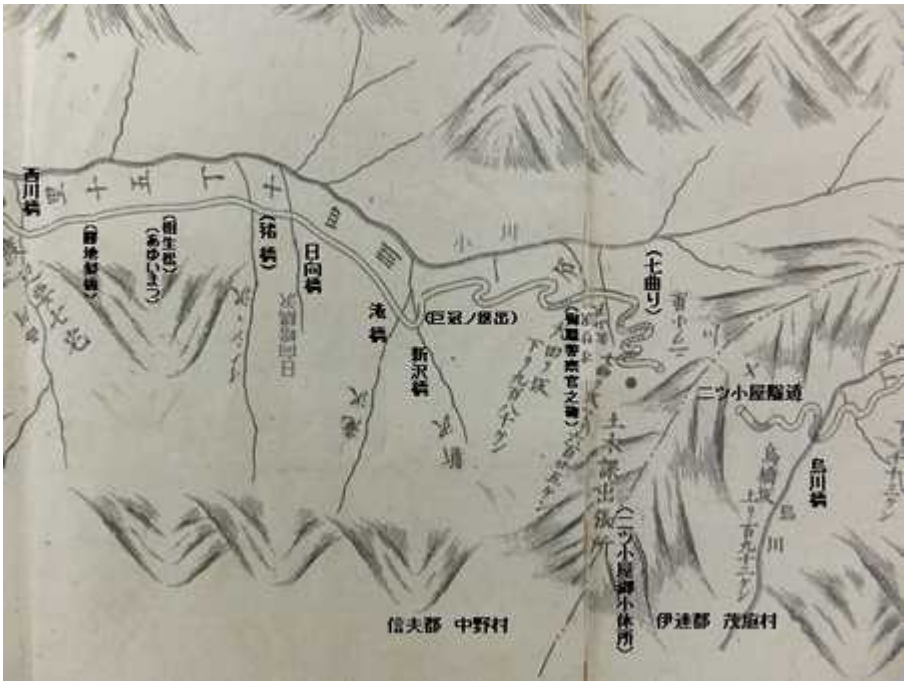
この辺り（大平地区）の地味はすこぶる肥沃で耕作するのに良いと思われるけれども、気候は常に寒く、真夏7月でさえもコブシ（木蓮華）の花が咲いていてまだ盛り〔全ク謝セス〕である。残雪が枯葉など〔塵埃〕の中に現れてまだ消えないでいる。谷や峰には雲や霧〔渓雲嶽霧〕のかかることが多く、ややもすると辺りが薄暗く〔溟濛〕なって回りの木々が区別つかなくなるほどである。（茂庭村）本村からは、約24キロメートル（6里）ほど離れ人跡も無く山林が繁茂し青葉〔翠陰〕が地を覆っている。ナラ・クリ・カエデ・シナノキ〔菩提樹〕等があり、一番多いのはエノキである。大きいものでは周囲約3メートル〔1丈余〕、高さ30メートル〔10丈〕前後に達するものが多い。ヒメマツ・ヒノキの大木もあるが数は極めて少ない。針葉樹の伐採跡の年輪〔歳圏〕を試しに数えたら200年を超えているようで、広葉樹の樹齢も同様であると思われる。

また少しずつ上り坂で1、2のカーブを過ぎ、天宝山の中腹を開削し〔剷開ラキ〕（大平峠）、烏川橋までゆるやかに下って行く。（途中で）右折して下るが、山が急峻なので（道路延長を長くするため）ヘビのようにくねらせた〔蜿蜒〕。（そのためカーブの）甚だしいところでは二人同行して（一人が）曲がると、崖をへだてて相対し同じ方向に向うのに顔を相見るほどである。周囲を見渡せば山又やまで、樹林は柱のようにすぐすくすくと伸びている〔木兼ナラサルナシ〕。（高い山が見えてくるが）左側の大山が二ツ小屋山で、右隣は月ノ嶺山である。

2. 烏川橋～新沢橋（「昭和の大改修」起点付近）

烏川橋～二ツ小屋隧道

烏川の源流はアキトオシ沢で、与平沢・太郎平墓沢を併せ約30キロメートルの延長で本村（茂庭村）字梨平〔梨木平〕に至り、摺上川に入り阿武隈川に合流する。水は清く砂もきれいなのでおよいでいる魚〔遊鱗〕の数をかぞえられるほどだ。下流に泣滝という滝がありその辺りにはヤマメ・イワナ〔鰍石魚〕の類いが多くいるけれども、これより上流には全くいない。それはその滝が高く険しいので魚が遡上できないためであると思われる。取れるのはカジカ〔杜父魚〕ばかりである。



沿道地図部分図-2　烏川橋～新沢橋（「昭和の大改修」起点付近）

ここに架かる橋は烏川橋（L=36.4m、W=6.4m）である。

ここから二ツ小屋隧道までは短い坂を上り隧道の手前左側に小屋〔仮廠〕があるけれども作業員の宿泊所（飯場）である。栗子隧道福島側坑口から二ツ小屋隧道山形側坑口までにいたる約5キロメートルのすべては茂庭村の官有山林地を潰して道路敷地としたものである。

二ツ小屋隧道

二ツ小屋隧道は、伊達・信夫両郡の境界になる。

二ツ小屋隧道の福島側坑口付近の岩質はもろく亀裂が発達〔脆鬆〕していたので、坑口から27メートルほど石巻すなわち石材（切石）を用いて巻立し〔層畳シ〕（壁や天井を作ること）半円状の洞門としたがまるで望遠鏡のように思われる。隧道の（天井部から）岩石が落下する恐れは無いと思われるが念のため、門形の支柱〔留木〕を設置した。山形側の45メートルばかりについても福島側と同様に石材で巻立しておいた。

この度の新道開削〔開鑿〕工事では、二ツ小屋隧道が最難関の工事であった。隧道の福島側には一二の建物（臚舎）があり、一つは（福島県の）土木課出張所、近くの小屋〔仮廠〕は作業員の宿泊所（飯場）である。

二ツ小屋隧道～七曲坂起点付近（現連絡道路入口付近）

（道路は）ここからカーブしながらだんだんに下がって行く。そこを（人が）歩いて行くと、（まず）東方に霊山を見下ろし〔下瞰シ〕、すぐにカーブして西方に二ツ小屋山を前面に望む。（次に）また、（カーブして）霊山に向い、また二ツ小屋山に向うということを七回繰り返すことから、この箇所を俗に「七曲り」と通称している。

七曲坂起点付近（現連絡道路入口付近）～大曲り～新沢橋（「昭和の大改修」起点付近）

そして金山沢・オサ沢〔オサ沢金山沢〕を経て一つのカーブがあり（カーブ群があり）「大曲り」と通称している。これ（道路）をめぐり新沢があり、流水は小川にそそいでいる。ここに架かっている橋を新沢橋〔新橋〕（L=14.5m、W=6.4m）という。

新沢橋の山形側（右岸）〔西北〕には巨大な岩盤〔巨岩〕があって（道路の開削にあたっては）上まで全部切取る〔除カサル〕ことができず岩盤が巨大な庇のように残って〔巨冠ノ挺出〕道路のほとんど中央までせり出した状態である。このところの道路下は絶壁になっていて中野新道では一番急峻なところといわれている。

（福島側へ進むと）新沢橋に接してすぐに滝橋（L=10.9m、W=6.4m）がある。その橋の前には、大きな岩盤〔犖确〕がありツチ〔椎〕やノミ〔鑿〕では役に立たず十分な掘削ができなかった〔撃砕スル事能ハス〕。（それで沢側に）石積擁壁〔石壁〕を設置して（盛土し）、道幅の半分ほどを新たに造成し〔増架〕（幅員を確保した）。その上（道路）には、木製の防護柵〔遮欄〕を設置し危険防止に備えた。

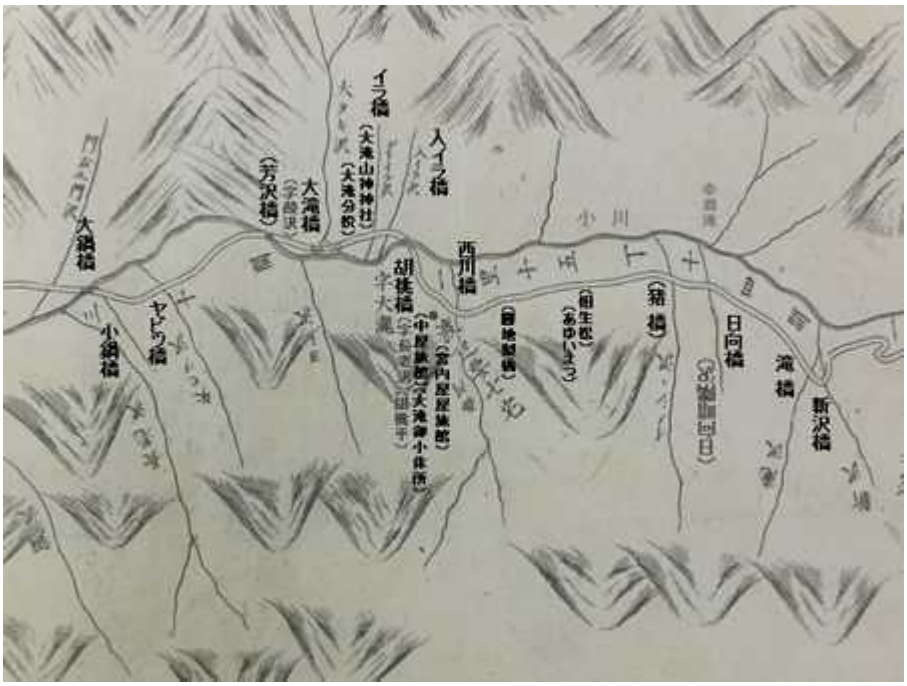
この区間は（難工事となったため）完成を諦めて〔目的ヲ失シ〕請負人が逃げてしまうことが度々あった。

3. 新沢橋(「昭和の大改修」起点付近)～大鍋橋

新沢橋(「昭和の大改修」起点付近)～西川橋(大滝集落(後日)終点付近)

（新沢橋から福島側へ進んで行くと）日向暗隅沢があり流水は小川に入る。橋があり日向橋（L=2.7m、W=6.4m）と呼ぶ。ここから約 1.3 キロメートル(福島側へ)行くと西川があり下流は小川に入る。ここに西川橋（L=15.5m、W=3.5m）が架かっている。

二ツ小屋からここまでゆるやかな下りですべて〔悉皆〕中野村の官有地を道路敷地としたものである。



沿道地図部分図-3　新沢橋(「昭和の大改修」起点付近)～大鍋橋

西川橋(大滝集落(後日)終点付近) ～大滝集落(後日)

これより胡桃平・大滝までの間は比較的平坦である。小川（両岸）を挟んで山林がありヒメマツ・アカマツ・シキミ〔榊〕・ナラ・〔木兼〕（樹木の種類不詳）の類が多い。伝えられるところによれば、20 年前までは（一帯には）森が茂りとくにアカマツが多く松茸〔松蕈〕が沢山採れたけれども、(森林を）伐採したため今は全く採れなくなったということである。地元民〔人民〕には、考えもせずにむやみに伐採してしまう良くない風習〔弊習〕があるので、これより〔自今〕速やかに対策を講じなければ恐らく今後不測の事態が発生するかも知れない。

大滝集落(後日)

（西川橋から少し行くと）左側に 2 戸の室屋（宿屋）がある。これは、新道ができれば便利になることを見越して早くもすでに（已ニ）居を構えたものであろう。

ここから（字長老沢、通称胡桃平）大滝に至る間は、すこぶる地味が良く（膏腴）、概ね 10 ヘクタール〔拾町歩〕の耕地が開けるだろう。

（ここには）小川という（名前の）川がある。新道中では第 2 の大きさとなる川である。水源は、（中野村の）西北の隅にある「日ノ峠」に発し（濫觴）、南に向いくねりながら下り、また折れて東に向って流下している。途中には、助一沢・谷地小屋・二ツ小屋・金山沢・御沢（ヲサ沢）・日向沢（日向クラスミハシ）・猪沢（イノシシハシ）・中小屋沢（中小ヤ沢）・勝地梨沢（カッチナシ沢）・横沢・芦沢・矢比地沢（ヤヒツハシ）・鍋越沢（小ナベハシ）・長老沢・滝沢・万太郎沢・鍋沢・筬橋沢・鳥屋沢・山葵沢・大瓶釣沢・小瓶釣沢等の各沢は北から下り小川にそそいでいる。門右衛門沢・入茂田沢・祝沢・暗隅沢・立溜木沢等は南から下り小川にそそいでいる。

（カッコ内は縦断図〔新道高低実測圖〕に記載された沢名若しくは橋名。本文には記載ないが当該

区間の縦断図には猪橋（イノシシハシ）が記載されている。また勝地梨沢に橋梁は記載されていないが実際に現地にあったものもある。新沢（縦断図には新沢橋と記載）が抜けている）。

これ（小川）を横断して胡桃橋（L=18.2m、W=6.4m）が架かっている。これより東南方向の山神橋に至るまで、中野村と大笹生村との村界が明確になっていない。（胡桃橋から少し行くと）入（いり）イラ沢があり小川にそそいでいるがこれに入イラ沢橋（L=3.0m、W=6.4m）が架かっている。続いてすぐにイラ沢があってこれにイラ橋（いら沢橋：L=10.9m、W=6.4m）がある。

この辺りには平地が多く 3、40 軒の家屋が建てられるであろう。ある人がいうには、大滝川の水を引いて水車小屋を設け、そして米沢から米穀を運んできて精米し〔精（きよ）ラケ〕、福島に運べば必ずや大もうけできること疑いなしである。（その）大滝川は、西南の方向にある滝上山に（源を）発し途中で諸渓流を併せて小川に入る。ここには、大滝橋（L=10.9m、W=6.4m）が架かっている。

後の大滝集落～大鍋橋付近

ここ（大滝橋）から（福島側へ）約 0.9 キロメートルのところにヤビツ沢があり小川に入るがこれにヤビツ橋（L=3.6m、W=6.4m）が架かっている。また（すぐ近くに）鍋越沢があり流水が小川に入りここに小鍋橋（L=10.9m、W=6.4m）が架かっている。小川の流水がまたここに巡ってきて大鍋橋（L=18.2m、W=6.4m）が架かっている（事業誌橋梁内訳書には葭沢橋〔芳沢橋〕もある）。

4. 大鍋橋～高平隧道（円部）

大鍋橋～山神橋

ここ（大鍋橋）からはだんだんに上り（坂で）、山を右にして川を左にして字西大桁（にしおおげた）まで続き、また下りになるがここから東南方向にある山神橋に至るまで（続き）上りとなることはない〔一歩モ発スル事ナシ〕。そして途中巨岩を取り除いたところが多いとはいえこれほど幅が広く〔濶（ひろ）ク〕かつ長い（下りの道路を）みたことがない。

沿道地図部分図-4　大鍋橋～高平隧道（円部）

たしかに始め東方にあるガロウ沢や銅沢など近傍をみながら道路の建設適地〔工業ノ易キヲ〕はないか（調査）測量をおこなったけれども全く見当らない。故にここに道路を建設するのはやむを得ないところである。ここは高く険しい岩場になっていて 30 メートル（十五間）ほどは発破をかけた〔火薬ヲ用イテ破裂スル〕。切取面の岩質〔余岩〕はもろく亀裂が多い〔脆鬆（ぜいしょう）〕ことから、暴風（雨）があれば落石の恐れがあることを予め知っておく必要がある。現在は、道路ができ〔工業既ニ成リ〕人々が（利用し

ているが）やみくもに通ることなく（用心深く注意しながら）ゆっくりと通行している。小川の流れは、切り立った崖のはるか下〔懸崖千尋〕の谷底〔澗底〕をくねり〔縈洄〕ながら（流れ）、（道路建設時に）捨土された残土が辺り一面を赤く〔赭ニ〕そめ、草木〔艸卉〕一本も生えていない。ここに（崖に）臨めば、（あまりの高さに）戦慄をおぼえ目がくらみ何時までも立っていられないほどである。

〈大桁隧道〉

大桁隧道は延長 L=29.1m・幅 W=5.45m・高さ H=3.6m、この路線当初は、単に山を開削〔斫開〕して道路を造る予定で隧道の計画はなかった。しかし、（現地検討の結果）隧道を造らなければ新道を通すことは到底できず、隧道工事に着手〔剏ル〕したものである。

ここ（大桁隧道）から東南方向にかけては山林が繁らず雑草〔草蕪〕がただ〔啻〕生い茂っているばかりである。これは、薪炭需要の高まりで地方人民が乱伐したためである。故に植樹することが今日の急務である。

山神橋～高平隧道（円部）

（その大桁隧道からしばらく行くと）小川がまためぐってきてここに出る。そこに山神橋（L=43.6m、W=6.4m）という板橋が架設されている。胡桃橋以東、この橋にいたる小川の西北の土地は官有地であるが、中野村としては菱川（水源を大笹生村東藤搦松に発し東北に向かい下り小川に合流する）をもって村界であるといい、大笹生村では小川中央を以て村界であるといっており、何れが正しいかは未だに分からない。

山神橋を渡る〔渉ル〕と字杉ノ平で沖根山の麓になりすこぶる平坦で数ヘクタール〔数町〕の耕地を開墾できるであろう。

〈高平隧道〉

山神橋からは、小川を右に（見て）ゆるやかに上り字高平に至り隧道がある。これを高平隧道（L=140.3m、W=5.45m、H=3.6m）という。初めこの地山の掘削（山腹ヲ洞鑿）をすると、岩盤には縦の節理（割れ目）が発達していて、あたかも細木を束ねて立てたかのようで、これを掘削すると必ず細片になり、大きな石を一つも切り（斫）採ることはできない。新道建設〔工業中〕にあたって第2の難工事〔苦難〕となった所である。高平隧道を福島側に出ると、左側に屏風のようにきりたった高い岩がそびえている〔巉巖〕。頭を思いっきり後ろに曲げるようにしないと上が見えないほどである〔頭ヲ極メ仰キテ垂ルルカ如クスルニアラサレハ望ムベカラス〕。

右側の小川の（崖も）危険で、石材による防護柵（遮欄）を設置したけれども、飾りなどは施さずただ〔啻〕危険防止だけを目的とした〔取ル〕ものである。

5. 高平隧道（円部）～板揚橋（現上小川橋）・川子坂（大笹生村）

円部～東瀬沼（篭岩）

（高平隧道の福島側は字円部で）、6～7 戸の茅屋（茅葺き屋根の家）が畑の中に散らばっている〔点綴〕。

これより西北に向かっては、新道のために耕地を潰すことはなかった。新道ができるまでは、中野村中心地から円部までは幅 60 ㎝（2 尺）未満の小径があるだけで、人馬が僅かに往来しているにすぎなかったけれども、今となっては、まるで別世界でもできたかのように思われている。

沿道地図部分図-5 高平隧道（円部）～板揚橋・川子坂（大笹生村）

故に近隣の地価は、初め一反歩（約 992 ㎡）当たり 50 円であったものが、今は 100 円でも売らないという。そもそも売る気が無いというものの、甲に問えば 100 円、乙に問えばその倍、さらに問えばますます高騰し、天井知らずの状態なので〔自ラ止ル所ヲ知ラサレハナリ〕（自分でも売り値を決められないのである）。そして（円部の先の）字銅屋・字瀬沼にも耕地や宅地があり、すべて〔都テ〕の風景は円部と異なることはない。

（その先の）字東瀬沼（篭岩）は、昔から大岩石山でその中腹を掘削して小径を造っていた。その幅員は僅か 60 ㎝強（2 尺強）で、故にむかし人馬（共に）足を滑らし数尋（10mほど）の谷底（澗底）へ転落することもあったという。（この岩山は）巨大で奇怪な形をしており、上から下まで凹凸が激しくその間からは老松が生え、北側から望むと猛獣が山登りでもしているように見え、南から見るとまるで蜂の巣〔蜂窩〕が風に吹かれて破れているかのようだ。工事の苦難のほどがしのばれる。

東瀬沼（篭岩）～堰場～板揚橋（旧中野村・大笹生村境界）、川子坂

（瀬沼）近隣の民有林には、マツ・スギ・ナラ・クリの樹木が多い。

字堰場に来ると道路に沿って点々と家屋があり（小さいながら）村落を形成している。ここから（堰場）は上飯坂村に行く新しい道路（上飯坂村新道）を開き、宇田郡中村地方（現相馬地方）から米沢への通行を便利にしようとするものである。

それからこの堰場では、飲料用（その他の）使用水が不足しているために、ひでりの年〔旱歳〕には米をとぐ（淅スル）にも小川まで下りて行かないと何もできず残念なことである。そこで、字堰坂の官有林地を利用して小坂をつくり、板揚橋までの間にある田地には盛土をして道路とした。これ（盛土）の現場〔工場〕が一番困難で、予算内では完成できず〔予算意ノ如クナラス失敗シテ〕

請負人〔受負人〕が逃亡することが少なからずあったという。

小川の流水は、またここ（旧中野村字板揚場・旧大笹生村字下川子坂間）にめぐってきて、その中央をもって（中野村と）大笹生村との境界としている。この西北（上流）ではウナギ〔鰻〕・ニジマス〔鱒〕・ヤマメ〔鰍〕・イワナ〔石魚〕・カジカ〔杜父魚〕・アユ〔香魚〕・ハヤ〔鮠〕等が採れた。

ここに板揚橋（L=27.3、W=7.3m）が架設されている。

また小坂あり川子坂〔旧字名カゴサカ〕という。

（「山地部編」おわり）

※ 本稿**「山地部編」**は、**別紙資料－1**『中野新道記』【『福島県直轄国道改修史』「中野新道雑記」（「雑記之部」活字版）】2頁右欄下から2行目まで、また **別紙資料－2**『中野新道記』【『萬世大路事業誌』原本】5頁№17中間までの現代語訳である。

※「雑記之部」（本稿名称『中野新道記』）付図、縦断図「從福島町元標　至栗子隧道口　新道高低実測圖」（原本接写、一部整理加筆）は**別紙資料－3** に示す（『萬世大路事業誌』所収）。

おわりに

本稿は、万世大路事業誌所収「雑記之部」（本稿名『中野新道記』）の現代語訳であるが、内実「雑記」と云うには似つかわしくない大切な情報が取り纏められている。むしろ『万世大路事業誌』のハイライト主要な報告書といっても差し支えないものであり、最も重要な文献での一つであると筆者は考えている。『中野新道記』（中野新道ルポ）と言換えさせて頂いた所以でもある。それというのも、万世大路関連の各種レポート執筆の上で、「雑記之部」は欠かすことのできない根本史料として何時も参考にしているものだからである。現在までは、自身による現代語訳（一部）を個人資料として用いているものの、それが正確なものであるかという疑問符は絶えずつきまとっている。この際、先達諸賢のご意見ご批判を承り正確を期したいものと思い敢えて公表させて頂いた次第である。今回の現代語訳の発表は、全く身の程知らずの企図である事は百も承知でありまさに汗顔の至りではあるが事情ご賢察の上ご教授いただければありがたく思います。

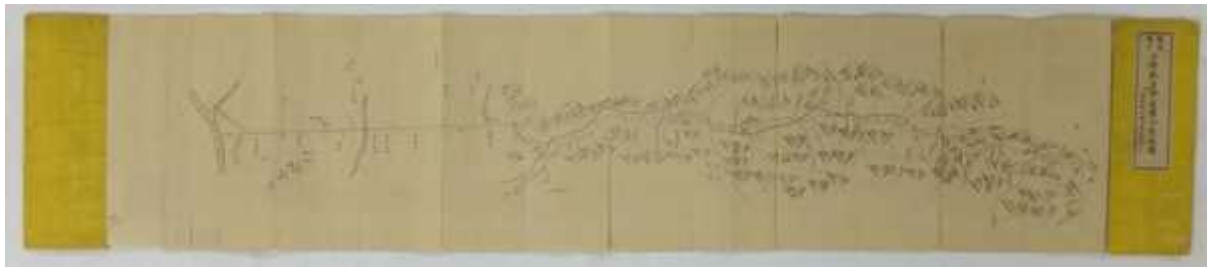
今回『山地部編』（栗子隧道福島側～板揚橋〔旧中野村・旧大笹生村境界〕）と『平地部編』（板揚橋～万世大路起点〔福島町里程元標〕）とに分割したことに特別の理由があるわけではなく、筆者レポートの大部分が現在までのところよく出かけている「山地部」に偏っているということだけである。勿論「平地部編」関連のレポートも若干存在するけれども、山地部ほどに現地調査等はおこなっていない。今後現地調査等を充実させ『平地部編』についても引き続き発表していきたいと考えているものである。

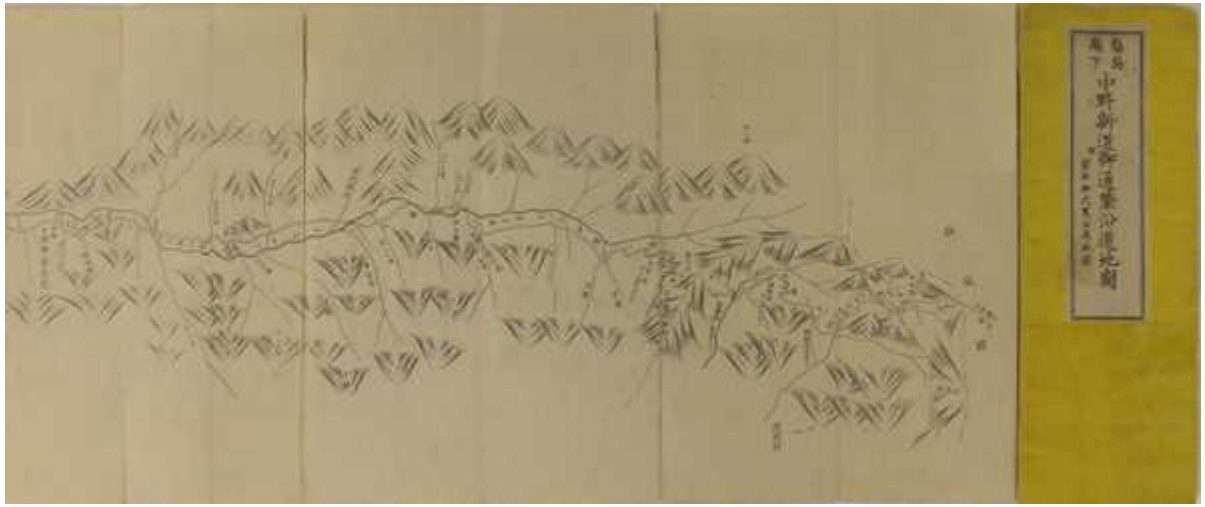
なお、恥の上塗りの感は拭えないが、本稿『中野新道記・山地部編』の解説については、稿を改めて逐次おこなう予定としている。

さて、今回も大滝会 HP 管理人紺野文英様には本稿編集に当たりお世話になりました。衷心より御礼申し上げます。

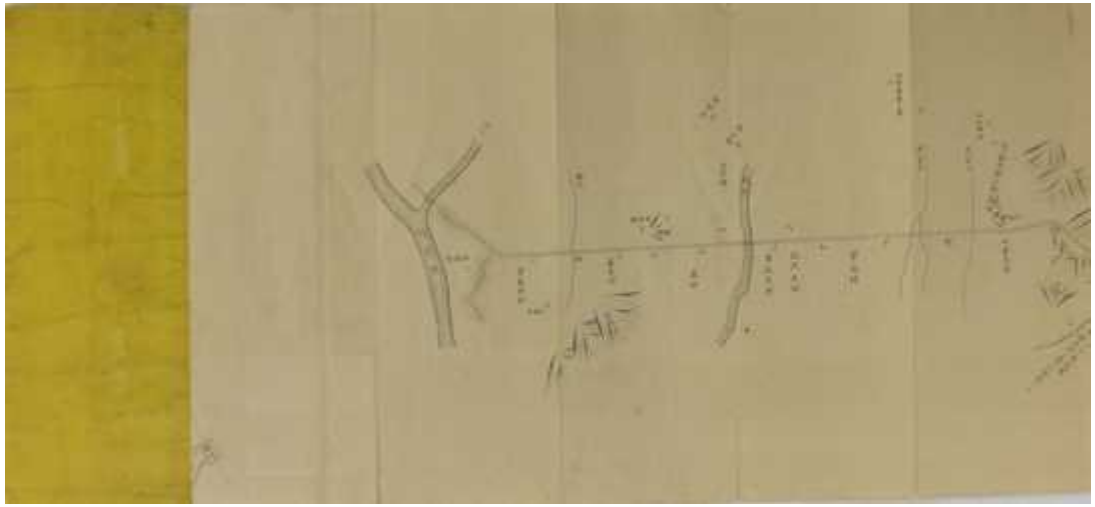
別添付図

『福島縣下中野新道御通輦沿道地圖』
（明治 14 年〔1881 年〕）





分割図（その 1）



分割図（その 3）

分割図（その 2）

（福島県立図書館　所蔵）

別紙資料－1　　『中野新道記』

【『福島県直轄国道改修史』「中野新道雑記」(「雑記之部」活字版)

当史料は、福島縣土木課編『萬世大路事業誌』(明治 14 年 9 月〔福島県歴史資料館蔵：明治・大正期の県庁文書史料番号 1961 番〕)に所収されている文書で、中野新道(栗子新道の福島県側〔栗子隧道除く〕のち万世大路)について「管轄境(栗子隧道から約 109m 手前)ヨリ福島ニ到ルノ間大略ヲ」(同文書末尾)報告しているルポルタージュである。『萬世大路事業誌』では、「雑記之部」という見出しになっているけれども、文書の中身を端的に示すと思われる『中野新道記』と表記(仮称)する。

ここに示した「活字版」は、建設省東北地方建設局福島工事事務所編『福島県直轄国道改修史』(昭和 40 年 3 月)所収からの転載である(原本の使用については福島県歴史資料館許可済)。原本と照合した結果転記ミス或いは誤植と思われるものがあったので、筆者の独断により修正してある。ただし、新字体(異字体)等への変更は訂正していない(ex. 県・縣、杭・杌、滝・瀧等)。

(5)　中野新道雑記

1.　栗子隧道ハ山形県羽前国南置賜郡上山上村ト福島県岩代国伊達郡茂庭村トノ官地ニシテ山形県ノ工業ニ係ル所タリ西北ノ隅ヨリ東南ノ隅ヲ貫通ス其延長八町強西北口ヨリ概ネ四町ヲ進ミ之ヲ羽前岩代両国ノ境界トナス東南ノ口ヲ出ツレハ東ニ廬舎アリ山形県官吏ノ出張所ニシテ工業役夫ノ薫督スルモノノ詰所タリ近傍ノ仮廠ハ工業役夫ノ寝宿スル所ナリ又東南口ヨリ出ツル道路壱町強モ亦山形県ニ於テ之ヲ作ル則隧道中ノ石片ヲ棄擲シタル地ナリ是ヲ両県就工ノ分境トス是ヨリ東南ハ我カ福島県ノ工業ニ係ル所ナリ後ヘヲ顧望スレハ大山アリ西ヲ小杭甲ト云ヒ東ヲ大杭甲ト云フ合テ之ヲ杭甲嶽ト呼ビ近傍屈指ノ高山トナス森林蓊鬱獣類為メニ巣窟ヲナシ毎歳猟人ノ獲物多シ気候常ニ寒冷ナリ其絶頂ニ至テハ樹木為メニ生長スルモノ少シ是ヨリ小杭甲橋ニ至ルノ間小坂ヲナシ漸々下リ屈曲ヲナス左ニ杭甲沢アリ之ニ架スルヲ小杭甲橋ト云フ延長拾間幅員三間是ヨリ少シク平夷ナリト雖モ又忽チ屈曲ヲナシテ下レハ一峰忽チ前ニ当ル之ヲ天宝山ト云フ形チ覆釜ノ如クニシテ濶葉樹尤モ多シ杭甲沢　遶テ又茲ニ出ツ水源ハ杭甲嶽ニ濫觴シテ北ヨリ南ニ流レ烏川ニ入リ摺上川ニ灌テ逢隈川ニ合ス之ニ架スルヲ大平橋ト云フ延長弐拾間幅員三間此近傍地味頗ル肥沃耕作起スヘシ然リト雖モ気候常ニ寒ク夏天七月ニ当ルト雖モ木蓮華花ヲ開キ未タ全ク謝セス残雪塵埃ノ中ニ露レテ猶漸滅セス溪雲嶽霧常ニ多ク動モスレハ溟濛近傍ノ樹林ヲ弁スル事能ハス本村ヲ距ル事概ネ六里為ニ人跡ナク山林繁茂翠蔭地ヲ蔽フ楢栗楓菩提樹等アリト雖モ十中ノ九ニ居ルモノハ榎木ナリ其ノ大ナルモノハ周囲一丈余高キ事拾丈前後ノモノ多シ姫松桧モ亦大木アリト雖モ其数甚タ稀ナリ嘗ミニ針葉樹ノ伐口跡ニ就キ歳圏ヲ数フレハ殆ント二百年ヲ経過セシモノノ如ク濶葉樹ノ年度モ亦推シテ知ルヘシ又漸々登リ一二ノ屈曲ヲ過キ天宝山ノ中復ヲ劃開ラキ烏川橋ニ至ルノ間寛緩ニ下ル其右折シテ下ルモノハ山急ナルヲ以テ道路ヲ蜿蜒ナラシメ其甚シキニ至リテハ二人同行シテ転回スレハ崖地ヲ隔テテ相逢ヒ前後各向フ所ノ儘ニシテ其面ヲ相見ルニ足ル四顧スレハ皆山又樹トシテ様ナラサルナシ(柱のように皆すくすくと伸びている)其左ノ大山ヲ二ッ小屋岳ト云ヒ其右ニ隣ルヲ月ノ嶺山ト云フ烏川ノ水源ハアキトフシ沢ヨリ出テ与平沢太郎平墓沢等ヨリ発シ本村字梨木平ニ至ル七里半ニシテ摺上川ニ入リ阿武隈川ニ合ス水清ク砂明ラカニシテ游鱗伏シテ而テ数フヘシ末流ニ瀑布アリ泣瀑ト云フ此辺鰍石魚ノ類多シト雖モ是ヨリ上流ニハ一モアル事ナシ蓋シ此瀑泉地勢高峻ニシテ登リ難キノ故ナルベシ故ニ生産スル所ノモノハ独リ杜父魚ノミ之ニ架スルヲ烏川橋ト云フ延長二十間幅員三間半是ヨリ二ッ小屋隧道ニ至ルノ間漸々小坂ヲ登リ左側ニ仮廠アリ即チ工業役夫ノ寝宿スル所タリ栗子隧道東南ノ口ヨリ二ッ小屋隧道北口ニ至ルマテ一里八町四拾九間都テ茂庭村官有山林地ヲ潰シテ道路敷地トナス二ッ小屋隧道ハ伊達信夫両郡ノ境界タリ隧道北口ノ石質脆脆ナルヲ以テ延長拾五間許石材ヲ層畳シ円月状ノ洞門ヲ作ル之ヲ観ルニ殆ント望遠鏡ノ想ヲナス隧道中石片ノ墜落スル憂ナキモ注意ノ為メ留木ヲ以テ備ヒヲナス南口モ亦二拾五間許同シク石材ヲ層畳スル事北口ノ如シ此新道開鑿着手中二ッ小屋隧道ヲ以テ最モ第一ノ難工トス而シテ茲ヲ出レハ一二ノ廬舎アリ則土木課出張所ナリ近傍ノ仮廠ハ工業役夫ノ寝宿所ナリ是ヨリ道路漸ニ低ク且迂回其歩行スルニ際シ東方ニ霊山ヲ下瞰シ忽チ屈曲シ之ヲ背テ西方二ッ小屋山ヲ前面ニ望ム又霊山ニ向ヒ又二ッ小屋ニ向フ如此スルモノ七度俗ニ之ヲ七曲リト呼ブ而シテオサ沢金山沢ヲ経テ一ッノ屈曲アリ俗ニ之ヲ大曲リト云フ之ヲ遶リテ新沢アリ流水小川ニ灌ク之ニ架スルヲ新橋ト云フ延長八間幅員三間半橋ノ西北ハ巨岩ヲ除ク其最上層ニアルモノハ尚悉ク除カサルヲ以テ巨冠ノ挺出セシモノハ殆ント道路ノ中央ニ及フ新道中ニ於テ突出セシ絶壁ハ茲ヲ第一峻急ナルモノトナスト云フ数歩ニシテ忽チ新橋ニ接シテ滝橋アリ延長六間幅員三間半橋前ノ岩石ハ犖确ニシテ椎鑿ヲ受ケス故ニ十分撃砕スル事能ハス因テ半ハ石壁ヲ以テ道路ニ増架シ上ニ木造ノ遮欄ヲ施シテ危険ニ備フ請負人等ノ目的ヲ失シ事業半ハニシテ逃亡シタルモノ数多アリ日向暗隅沢アリ流水小川ニ入ル橋アリ日向橋ト呼フ延長一間半幅員三間半是ヨリ拾一町五拾四間ニ

シテ西川アリ下流小川ニ入ル之ニ架スルヲ西川橋ト云フ延長八間半幅員三間半二ッ小屋ヨリ茲ニ至ルノ間寛カナル下リニシテ悉皆中野村ノ官有地ヲ潰シタルモノナリ是ヨリ胡桃平大滝ノ間較ヤ平夷ナリ小川ノ一帯ヲ挾ンテ山林対立ス姫松赤松榧檜槲ノ類多シ或ハ云フ今ヲ距ル二十年前ハ赤松殊ニ森茂松鬱ノ産物盛大ナリシト雖モ伐木セシ後ハ一モ生スル事ナシト人民猥リニ伐採スルノ弊習アルヲ以テ自今ニ於テ速ニ之カ備ヘヲナサズンバ恐クハ不測ノ障害ヲ発スルモ知ルヘカラス左側ニ二戸ノ室屋アリ是則チ新道ノ便ナルヲ覚リテ早ク已ニ茲ニ卜居シタリ是ヨリ大滝ニ到ルノ間地味頗ル膏腴概ネ拾町歩ノ耕地ヲ闢クヘシ川アリ小川ト云ウ新道中ニハ之ヲ第二ノ大川トス水源ハ西北隅日ノ峠ニ濫觴シ南ニ向ヒ紆余トシテ下リ又屈折シテ東ニ向ヒテ下ル其経ル所助一沢谷地小屋二ッ小屋金山沢御沢日向沢猪沢中小屋沢勝地梨沢横沢芦沢矢比地沢鍋越沢長老沢滝沢万太郎沢鍋沢箒橋沢鳥屋沢山葵沢大瓶釣沢小瓶釣沢等ノ水ハ北ヨリ下リテ此川ニ注キ門右衛門沢入茂田沢祝沢暗隅沢立溜木沢等ノ水ハ南ヨリ下リテ此川ニ注ク之ヲ横断シテ架スルヲ胡桃橋ト呼フ延長拾間幅員三間半是ヨリ東南山神橋ニ至ルノ間中野村ト大笹生村ノ村界分明ナラス入イラ沢アリ流水小川ニ注ク之ニ架スルヲ入イラ橋ト呼フ延長一間四尺幅員三間半又イラ沢ハ殆ント之ニ接続スイラ橋ト云フ延長六間幅員三間半近傍ニ平地多ク三四十ノ家屋ヲ建築スルニ足ルヘシ或ハ曰ク大滝川ノ水ヲ引水車ヲ設ケ而シテ米沢ヨリ米穀ヲ輸入シ以テ之ヲ精ラケ福島地方ニ輸出セハ必ラス巨利ヲ得ルヤ疑ナカルヘシト大滝川アリ源ヲ西南ノ滝上山ニ発シ東ニ向テ下ル其経ル所ノ衆溪流ヲ併セテ小川ニ入ル之ニ架シタルヲ大滝橋ト云フ延長六間幅員三間半茲ヲ距ル四百八十四間ニシテヤビツ沢アリ流水ハ小川ニ入ル之ニ架スルヲヤビツ橋ト云フ延長二間幅員三間半又鍋越沢アリ流水小川ニ入ル之ニ架スルヲ小鍋橋ト云フ延長六間幅員三間半小川ノ流水邊テ又茲ニ出ツ之ニ架スルヲ大鍋橋ト云フ延長拾間幅員三間半是ヨリ漸々上リ山ヲ右ニシ川ヲ左ニシ字西大桁ニ到テ又下リ是ヨリ東南山神橋ニ至ルノ間一歩モ発スル事ナシ而シテ巨岩ヲ除キタル地所多シト雖モ此ノ如キ濶ク且ツ長キモノヲ見ス蓋シ初メ東方ガロウ沢銅沢近傍ヲ相シ屢々測量シテ以テ工業ノ易キヲ求ムレ𪜈毫モ得ル所ナシ故ニ茲ニ道路ヲ闢クモノハ又止ヲ得サル所以ナリ其高峻ナル事殆ント十五間許初メ火薬ヲ用ヒテ破裂スル余岩脆毀若シ一旦暴風吹去ラハ石片ノ崩落センモ亦料知ルヘカラス故ニ茲ヲ過ルモノ疾走セサルモノナキコト今ヤ工業既ニ成リ人皆徐行スル事ヲ得タリ小川ノ流水ハ懸崖千尋ノ澗底ヲ縈洄シ剩土ヲ拋棄シタル跡ハ其色尽ク赭ニシテ又一根ノ卿丹ヲ生スルヲ見ス此ニ臨メハ人ヲシテ戦栗瞑眩久立スベカラサラシム大桁隧道ハ延長拾六間幅員三間高サ二間是所ノ路線初メ只山路ヲ斫開スルニ止リ曾テ隧道ヲ造ルノ意無シ然ルニ到底隧ヲ造ルニ非ンハ新道ヲ開通スル能ハス故ニ意ニ隧ヲ穿チ洞門ヲ剏ル如此是ヨリ東南山林茂密セス啻ニ草蕪ノミ蓋シ地方人民ノ薪炭需用ニ濫伐セシニ原因ス故ニ植樹ハ今日ノ急務ナリトス小川ノ流水邊テ又茲ニ出ツ之ニ架スルヲ山神橋ト云フ延長二拾四間幅員三間半即チ板橋ナリ胡桃橋以東此橋ニ至ル間小川ノ西北ニ係ル地所ハ官有地ナリト雖モ中野村　ニテハ菱川(源ヲ大笹往村東麻柵松ニ発シ西北ニ向ヒ下リ小川ニ入ル)水脈ヲ以テ村界ナリト云ヒ大笹村ニテハ小川中央ヲ以テ村界ナリト云フ未タ何レカ是ナル事ヲ知ラス橋ヲ渉レハ字杉ノ平ハ沖根山ノ麓ニシテ頗ル平夷数町ノ耕地ヲ開墾スヘシ山神橋ヨリ小川ヲ右ニシ緩寛ニ登リ字高平ニ到リ隧道アリ之ヲ高平隧道ト云フ延長七拾七間二分幅員三間高サ二間初メ山復ヲ洞鑿スルヤ岩理悉ク縦ニ走リ恰モ細木ヲ束ネテ立ルカ如ク之ヲ砕クニ必ラス小片トナリ一大石ヲモ斫採ル能ハス茲ヲ工業中第二ノ苦難トス洞門ヲ出ツレハ左側ハ巉巖屏風ノ如シ頭ヲ極メ仰キテ垂ルルカ如クスルニアラサレハ望ムベカラス右側小川モ亦危險故ニ遮欄ヲ施スニ石材ヲ以テシ極メテ虚飾ヲ用ヒス啻ニ危難ヲ避ルニ取ルノミ字円部ニ至レハ茅屋六七耕地ノ間ニ点綴ス是ヨリ西北ニ耕地ヲ潰シタルモノナシ新道ヲ開ラカサル以前ハ中野村本部落ヨリ円部ニ到ルノ間二尺未満ノ小逕ニテ人馬僅カニ往来セシヲ以テ現今ニ至テハ別ニ天地ヲ開創セシモノノ如キ思想ヲナス故ニ近傍地所ノ代価ハ初メ一反歩五拾円ナルモ今日ハ一百円猶売却セス蓋シ売ル事ヲ欲セサルニアラスト雖モ甲ニ問ヘハ一百円乙ニ問ヘハ之ニ倍シ愈々問ヘハ愈々騰リ自ラ止ル所ヲ知ラサレハナリ而シテ字鍋屋字瀬沼並ニ耕宅地アリ都テ風景ハ円部ニ異ル事ナシ字東瀬沼ハ古来一大岩石ノ半復ヲ堰割リ小径ヲ作リタルモノアリ其幅員僅カニ二尺強故ニ往時人馬誤テ足ヲ失シ数尋ノ澗底ヘ隕落セシモノアリト云フ巨巌聳奇上下凸凹老松其間ニ排立シ北方ヨリ之ヲ望メハ猛獣ノ山ニ登ルカ如ク南方ヨリ之ヲ望メハ蜂窩ノ風ニ破ルルカ如シ工事ノ苦難又思フヘシ近傍ノ民林ハ松杉楢栗ノ樹木多シ字堰場ニ到レハ家屋点々道路ニ沿フテ殆ント一小村落ヲナス是ヨリ上飯坂村ニ到ル新道ヲ開キ以テ宇多郡中村地方ヨリ米沢ニ通行スルノ便ヲ得セシメントス而シテ此堰場ハ飲水使用水ノ足ラサルヲ以テ旱歳ニハ米ヲ漸スルニモ小川ニ下ラサレハ能ハス之ヲ惜ムヘシトナス而シテ字堰坂官林ヲ貫ヒテ小坂ヲ作リ板揚橋ニ到ルノ間田地ニ土石ヲ盛リテ道路トス埋坪中第一ノ労工場タリ受負人ノ予算意ノ如クナラス失敗シテ走ルモノ亦少カラスト云ウ小川ノ流水邊テ又茲ニ出ツ此中央ヲ以テ大笹生村ノ界トス是ヨリ西北ニ生産スルモノ鰻鱒鰍石魚杜父魚香魚鮠等ノ魚類アリ之ニ架スルハ即チ坂揚橋ト云フ延長拾五間幅員四間又小坂アリ川子坂ト云フ登事二町余西ニ栗林アリ秋季収穫多シ堰アリ井佐野堰ト云フ幅員一間半戌位ニ当リ拾

二町奥小川ヨリ水ヲ疏シ大笹生村井佐野村入江野村平塚村ノ田地九拾四町歩余ニ灌漑ス鮑生産ス右折スレハ道路頗ル平夷左右両三ノ家屋アリ大笹生村ノ支村トス井佐野堰ヨリ一町四拾間ヲ経過シテ俎山官林ノ麓ヲ劃開ク事五町三拾間左ニ鬼越山官林アリ並ニ預メ半田鉱山ノ需要ニ充備スルモノナリ女松繁茂椎樹又多シ万延文久ノ度旧半田銀山需用ノ為メニ伐採セラル当時樹林繁茂ノ際多ク松茸ヲ生ス樹林稀薄ニ逢ンテソノ松茸ヲ生スル亦随テ滅スト云フ路傍ニ溜池アリ十六沼ト云ウ面積一町三反歩深サ八尺水源ハ俎山ヨリ出ツ本村ノ田地六町歩ニ灌漑ス又家屋アリ字坐頭町ト云フ初メ道路ヲ開鑿スル頃ハ宅地一反歩ノ代金五拾円ナリト雖モ現今既ニ騰貴シテ一百円ト雖モ肯テ売ルモノ稀ナリ蓋シ道路ニ沿フテ商店ヲ開業セントスルモノ比々皆然ラサルナキナリ横断シテ道路アリ其幅員二間飯坂ヨリ庭坂村ヲ経テ米沢街道ニ達スルモノ都テ茲ニ由ル近傍ノ畑地ハ桑樹多シ初メ二三年前ハ一反歩ノ代価四拾円ナルモ現今ハ騰貴シテ八拾円ナリ又林地ノ如キハ両三年前ハ一反歩ノ代価僅ニ八円ニ上ラサルモ現今ハ已ニ三拾円ヲ以テセサレハ之ヲ得ル事能ハス路西ニ一ノ民林アリ字ヲ羽根山ト云フ高サ平地ヨリ三拾間七分周囲拾八町段別五町歩栗樹繁茂ス松杉楢竹モ亦生セサルニ非スト雖モ並ニ等フルニ足ラス初メ官林ニシテ半田銀山ノ需用ノ為ニ伐木ス残松楢頂上ニアリ明治八年中還禄士族ヘ払下ニ係リ民有ニ帰シタルモノナリ是ヨリ福島ニ至ルノ間通路屈曲ナク恰モ画一ノ如シ且平坦ナル事砥面ニ似タリ此道路ヲ作ルニ当リ笹谷村ニ仮監獄署ヲ設ケ懲役人ヲシテ工業ニ従事セシメ獄吏之レカ督ヲナス橋アリ北八反橋ト云フ延長四間幅員三間半之ヲ八反川ト云フ水源ハ本村俎山官林ヨリ出テ笹谷村ニ入リ南八反川ニ合ス凡一里水清例ニシテ鯉シ鰻鮒銀魚(形チ杜父魚ニ肖テ芒アリ其色黝黑)鮠等ノ生産スルモノアリ是ヨリ凡四町ニシテ笹谷村ニ相接ス則チ百二拾間許ニシテ南八反川アリ源ハ西北大笹谷村鉢森山ヨリ出テ東鎌田村ニテ阿武隈川ニ入ル三里二十五町水清澈鰻鮠杜父魚銀魚鯰等ヲ生産ス茲ニ架スルヲ南八反橋ト云フ延長五間幅員三間半之ニ接近シ大堰アリ水ヲ松川ヨリ引ク茲ニ架スルヲ向橋ト云フ延長二間堰員三間半道アリ幅員二間近村ヨリ米沢ニ通行セント欲スルモノ新道開設以前ハ此道ヲ取リ西隣笹木野村ニ到ル而シテ此近辺道路ニ潰シタルモノハ多ク田地ナリ其内過半泥田ナルニヨリ石ヲ埋メ木ヲ埋メ又土砂ヲ埋メシ箇所少ナカラス田地ノ代価初メニ比較スレハ騰貴スルモノ殆ント二倍宅地畑村地ノ類モ亦之ニ同シ是レ他ナシ物価ノ騰貴セシト新道ノ便ヲ得タルトニ外ナラス北沢又村ヲ経テ南沢又村ニ到リ大川アリ松川ト云フ水源ニアリ一ハ羽前国置賜郡大沢村姥湯温泉ヲ経板谷村五色温泉ノ山趾ヲ経テ東流シ同村産ケ沢ニ至ル一ハ産ケ沢ノ奥ニ発シ東北流シ羽前岩代ノ界標ヨリ少シク北ニ至リ二派相合シテ東シ信夫郡五十辺村ニテ阿武隈川ニ入ル里程七里二拾四町ナリ上流姥湯ハ一山皆硫黄ヲ含ミ且ツ三所ノ温泉皆此川ニ入ルヲ以テ末流鱗族ヲ生セス誤テ此ニ入ル魚類ハ立所ニ死ス之ヲ新道ノ第一大川トス即チ松川橋是ナリ延長七拾間幅員四間初メノ予算金ハ二千八百円ナルモ実費セシモノハ二千九百七拾四円七銭六厘其増シタルモノハ物価沿革ノ致ス所又止ヲ得サルナリ是ヨリ西ニ距ル事三町許リニシテ一泉アリ柳清水ト云フ隣村泉村佐藤柳次郎ノ発起ニテ福島町半沢喜造小泉平兵衛等又之ニ與ミシ明治十二年五月新道成ルヲ以テ此水路ヲ道路ニ穿チ伏樋ヲ埋メ以テ福島街ニ引カン事ヲ請願セシニヨリ大ニ之ヲ賛成シ本県九等属植田藤作ヲシテ地勢ノ高低水量ノ多寡伏樋構造等ノ事ヲ計画セシメ力ヲ添ヘ以テ遂ニ功ヲ奏スルヲ得タリ福島市街二千百五拾五戸日用ノ飲水ハ惣テ之ニ由ル森合村ト曾根田ノ村界ニ払川アリ笹木野村字萱場ニ於テ松川ヲ堰引ス水清ク流レ緩ナリ近傍ノ田地二十六町五反二畝二十八歩ニ漑ク之ニ架スルヲ払川橋ト云延長二間幅員三間半大笹生村ヨリ福島ニ到ルノ間道路ニ沿フテ居ヲ占ムルモノ点々トシテ未タ稽ヲ連ヌルニ至ラスト雖モ家屋ヲ設ケン事ヲ希フモノ比々皆然ラサルモノナシ則チ管轄境ヨリ福島ニ到ルノ間大略ヲ述フル事如斯

（明治十四年福島県土木課編万世大路事業誌の「雑記之部」より転載）

福島県直轄国道改修史

昭和40年3月

編集　建設省東北地方建設局
発行　福島工事事務所
福島市清明町1

印刷所　山田印刷株式会社
仙台市常盤丁38

別紙資料－2　『中野新道記』　【『萬世大路事業誌』「雑記之部」原本】

No.1

雑記之部

一　栗子隧道ハ山形縣羽前國南置賜郡上山上村ト福島縣岩代國田達郡茂庭村トノ境地ニシテ山形縣ノ工業ニ係ル所タリ而北ノ隅ヨリ東南ノ隅ヲ貫通ス其延長八町強而北口ヨリ概ネ四町ヲ進ミ之ヲ羽前岩代両國ノ境界トナス東南ノ口ヲ出ツレハ東ニ廨舎アリ山形縣官吏ノ出張所ニシテ工業役夫ノ督ス所ノ事務ハ工業役夫ノ寝所タリ近傍ノ民家ハ工業役夫ノ寝所スル所タリ又東南口ヨリ出ツル道路ハ町強ニ亦山形縣ニ於テ之ヲ作ル則隧道中ノ石片ヲ乗棄シタル地タリ是ヲ両縣就工ノ分境トス是ヨリ東南ハ我カ福島縣ノ工業ニ係ル

No.2

所タリ後ヘヲ顧望スレハ大山アリ西ヲ小杭甲ト云ヒ東ヲ大杭甲ト云フ合テ之ヲ杭甲嶽ト呼ビ近傍屈指ノ高山トナス森林蓊鬱歟頗為メニ巣窟ヲナシ為歟猟人ノ獲物多シ氣候常ニ寒冷タリ其絶頂ニ至ニハ樹木為メニ生長スルモノ少シ是ヨリ小杭甲橋ニ至ル間小坂ヲナシ漸々下リ屈曲ヲナス左ニ杭甲沢アリ之ニ架スル小杭甲橋トニフ延長拾間幅員三間是ヨリ少シク平夷タリト雖モ又忽チ屈曲ヲナシテ下レハ一峯忽チ聳ニ当ル之ヲ天室山トニフ形ヲ覆釜ノ如クニシテ樹木モ多シ杭甲沢遠ヲ又茲ニ出ツ水源ハ杭甲嶽ニ湧鶴シテ北ヨリ南ニ流シ鳥川ニ入リ

No.3

橋上川ニ達ス道路ニ合ス之ヲ祭ルヲ大平橋トニフ延長弐拾間幅員三間此近傍地味頗ル肥沃耕作甚ハシ然リト雖モ氣候常ニ寒ク夏天七月ニ当ルト雖モ未蓮華花ヲ開キ未ダ全ク謝セス残雪塵埃ノ中ニ露レテ消滅セス渓雪嶽嶺常ニ多ク動モスレハ溟濛近傍ノ樹林ヲ辨スル能ハス本村ヲ距ル概キ拾里為ニ人跡ナク山林繁茂翠蔭地ヲ敷ク楓樹楓樹ハ樹幹アリト雖モ十中ノ九ニ居ル モノハ周囲参尺乃至高キ拾丈前後トモノ多シ姫柏樹モ亦大木アリト雖モ其数甚タ稀ナリ常ニ針葉樹ノ伐ル所ニ就キ歳周ヲ数フレハ猶ホ弐百年ヲ経過セシモノヽ如シ周

No.4

葉樹ノ年度モ亦推シテ知ルヘシ又漸ク登リ一二ノ屈曲ヲ過キ天室山ノ中腹ヲ劃間ヲ鳥川橋ニ至ル間覓渡ニ下ル其右折シテ下ルモノハ山急ナルヲ以テ道路ヲ蜿蜒ナラシメ其甚シキニ至リテハ二人同行シテ轉回セハ崖地ヲ隔テ相遥ヒ前後各向フ所ノ峰ニシテ其間ヲ相見ル能ハス四顧スレハ皆山又樹トシテ様ナラサルナシ其左ハ大山ヲ二ツ小屋岳トニフ其右ニ隣ル日ノ顔山トニフ鳥川ノ水源ハアキトフシ沢ニ出ツ洪平沢太郎平巷沢等ヲ発シ本村字梨木平ニ至ル七里半ニシテ橋上川ニ入リ阿武隈川ニ合ス水清ク砂明ラカニシテ游鱗代ニ多数

No.5

ナハ之ト流ニ落下ナリ流落トモ之ハ此邊ノ
奥ノ類多シト雖モ是ヨリ上流ニハ一モアル
コトナシ蓋シ此渓泉地勢高峻ニシテ登ノ難キ
ノ故ナルベシ故ニ生産スル所ノモノハ獨リ
杜又曲ノミ之ニ架スルヲ鳥川橋トシテ延長
弐拾間幅員三間半是ヨリ二ツノ屋隧道ニ至
ル間漸々ノ坂ヲ登リ左側ニ假廠アリ則チ
工業役夫ノ寄宿スル所タリ栗子隧道東南ノ
口ヨリ二ツノ屋隧道北口ニ至ルニテ壱里八
町四拾九間都テ成庭村官有山林地ヲ漫シテ
道路敷地トナス二ツノ屋隧道ハ伊達信夫両
郡ノ境界ノ隧道北口ノ石壁晩製ナルヲ以
テ延長拾五間許石材ヲ層疊シ田月狀ノ洞門

No.6

ヲ作ル之ヲ觀ルニ猶ホト望遠鏡ノ想ヲナス
隧道中石片ノ墜落スル憂ナキヲ注意ノ為ノ
留水ヲ以テ備ヘナス南口モ亦弐拾五間許
同ジク石材ヲ層疊スル丁北口ノ如シ此新道
開鑿有手ナ二ツノ屋隧道ヲ以テ最モ難一ノ
難工トスル而シテ茲ヲ出ル一二ノ廠舍アリ
則土木課出張所ナリ此傍ノ假廠ハ工業役夫
ノ寄宿所ナリ是ヨリ道路漸ニ低ク且ツ田其
歩行スルニ際シ東方ニ蔵山ヲ下瞰シ忽チ屈
曲シ之ヲ背ヲ西方二ツノ屋山ヲ前面ニ望ム
又蔵山ノ向ヒ又二ツノ屋ニ向ノ如此スル
ハ七度俗ニ之ヲ七曲リト呼ブ例トシテ沢
蔵山沢ヲ経テ一ツノ屈曲アリ活ニ之ヲ大曲

No.7

リトシテ之ヲ遠ク望ム新橋トシテ延長八間幅員三
間半橋ノ西北ハ巨岩ヲ深ク其最上層ハ
モノハ猶志ク除カルヲ以テ巨岩ノ根出セ
モノハ殆ント通路ノ中央ニ及ブ新道中ニ
於テ突出セシ絶壁ハ茲ヲ平一政急ナルモノ
トナストシテ激流ニシテ忽チ新橋ニ接シテ
流橋アリ延長六間幅員三間半橋前ノ岩石ハ
爆破シテ推壁ヲ受ケス故ニ十分撃砕スル
能ハス間ヲ半ハ石壁ヲ以テ通路ニ増築シ
上ニ木造ノ欄干ヲ施シテ危険ニ備フ請負人
等ノ目的ヲ失シ事業半ハニシテ進セシタル
モノ数多アリ日向暗隅沢アリ流水小川ニ入

No.8

ル橋アリ日向橋ト呼ブ延長壱間半幅員三間
半是ヨリ拾壱所五拾四間ニシテ西川アリ下
流小川ニ入ルヲ以テ架スルヲ西川橋トシテ延
長八間半幅員三間半二ツノ小屋アリ茲ニ至ル
間覆力ナル下ニシテ地皆中野村ノ管有
地ヲ潰シタルモノナリ是ヨリ胡桃平大滝ノ
間数ヶ平夷ナリ小川ノ一帯ヲ挾ミテ山林對
立ス姫松赤松橋桶樋ノ類多シ或ハ之ヲ今ヲ
距ル二十年前ハ赤松林ニ杉茂松等ノ産物盛
大ナリシト雖モ伐木セシ後ハ一モ生スル丁
ナシト人民猥リニ伐採スルノ弊習ヲ以テ
目今ニ於テ速ニ之ヲ補ヘヲナサズンハ恐
リハ不測ノ障害ヲ発スルヲ知ルベカラス左

No.9

側ニ二ノ室屋ヲ建テ則チ新道ノ渡ナルヲ
覚ヲ早クモ之ニ益ニト居シリ是ヨリ大瀧
ニ到ル間地味頗ル膏腴桃ヲ植町歩ノ耕地
ヲ開クヘシ川アリ小川トヨフ新道中ニハ之
ヲ才二ノ大川トス水源ハ西北隅日ノ峠ヨリ流
ルヽ南ニ向ヒ斜線トシテ下リ又屈折シテ東
ニ向ヒ下ル其経ル所勝一沢谷地小屋二ツ
小屋金山沢御沢日向沢猪沢中小屋沢勝地梁
沢横沢苦澤矢比地沢猫越沢長光沢滝沢名取
郎沢鍋沢筑橋沢馬屋沢山葵沢大親鈎沢小鈎
親沢手ノ水ハ北ヨリ下リテ此川ニ注キ門古
工門沢入茂田沢祝沢暗隅沢立滑太等ノ水ハ
南ヨリ下リテ此川ニ注ク之ヲ横断シテ架ス

No.10

ルヲ胡桃橋ト呼フ延長拾間幅員三間半是ヨ
リ東南山神橋ニ至ル間中野村ト大笹生村
ノ村界分明ナラズ入イラ沢アリ流水小川ニ
注ク之ニ架スルヲ入イラ橋ト呼フ延長弐間
四尺幅員三間半又イラ沢ハ猫ヒヒ之ニ接続
スイラ橋トヨフ延長六間幅員三間半道傍ニ
平地多カラズ三四十ノ家屋ヲ建築スルニ足ル
ヘシ或ハ曰フ大瀧川ノ水ヲ引水中ヲ設ケ而シ
テ米沢ヨリ米穀ヲ輸入シ以テ之ヲ捐テテ福
島地方ニ輸出セハ必ラズ巨利ヲ得ルヤ疑ナ
カルヘシト大瀧川アリ源ヲ西南ノ渡上山ニ
発シ東ニ向テ下ル其経ル所ノ渓流流ヲ集セ
テ小川ニ入ル之ニ架スルヲ大瀧橋トヨフ

No.11

延長六間幅員三間半是ヨリ距ル四百八十四間
ニシテヤビツ沢アリ流水小川ニ入ル之ニ
架スルヲヤビツ橋トヨフ延長弐間幅員三間
半又鍋越沢アリ流水小川ニ入ル之ニ架スル
ヲ小鍋橋トヨフ延長六間幅員三間半小川ノ
流水遠ク又益ニ出ツ之ニ架スルヲ大鍋橋ト
ヨフ延長拾間幅員三間半是ヨリ漸ク上リ山
ノ右ニシテ川ヲ左ニシテ西大桁ニ到テ又下リ
是ヨリ東南山神橋ニ至ル間一歩ニ殺スル
ヲナシ而シテ巨岩ヲ除キタル地所多シト雖
モ此ノ如キ渓ヲ且ツ長キモノヲ見ス蓋シ初
メ彼方ノ口ヨリ沢銅沢迄傍ニ相シ度ニ測量シ
以テ工業ノ易キヲ求ムレハ毫モ得ル所ナ

No.12

シ故ニ益ニ道路ヲ開クモ、ハ又止ヲ得サル
而以テ其高後ナルヿ猫ニトナ五間許功ヲ
火薬ヲ用ヒテ破裂スル餘若晩鈴若シ一旦暴
風吹キテハ石片ノ崩落セシモ亦料知ルヘカ
ラス故ニ益ヲ道ルモノ疾走セサルモノナキ
コト今ヤ工業既ニ成リ人皆徐行スルヿヲ得
タリ小川ノ流水ハ懸崖千尋ノ澗底ヲ縈迴シ
剣立ヲ地重シタル跡ハ其色蓋ヲ鎖シテ又
一根ノ柳ヲ生セルヲ見ス此ニ臨ノハ人ヲ
シテ戦栗瞑眩久ク立スベカラサラシム大桁隧
道ハ延長拾六間幅員三間高サ弐間是所ノ路
線功ノ只山路ヲ開スルニ止リ曾テ隧道ヲ
造ルノ意無シ然ルニ到底隧ヲ造ルニ非ンバ

No.13

新道ヲ開通スル能ハス故ニ竟ニ隧ヲ穿ツ洞
門ヲ般ハ如此是ヨリ東南山林茂密セス畑
草莽ノミ蓋シ地方人民ノ新奇需用ニ適セ
シニ際因ス故ニ植樹ハ今日ノ急務ナリトス
小川ノ流水麓ヲ又茲ニ出ツ之ニ架スル山
神橋トヲ延長弐拾四間幅員三間半即チ板
橋ナリ胡桃橋以東此橋ニ至ル間小川ノ西
北ニ係ル地所ハ官有地ナリト雖モ中野村ニ
ハ菱川源ヲ大笹原村東端橋ノ水脈ヲ以テ村界
ナリトスト大笹生村ニハ小川中央ヲ以テ
村界ナリトスフキヲ何レカ是ナルヲ知ラ
ス橋ヲ渉レハ字杉ノ平ハ神根山ノ麓ニシテ
頗ル平夷数所ノ耕地ヲ開墾スヘシ山神橋ヨ

No.14

リ小川ヲ右ニシ幾寛ニ登リ字高平ニ到リ隧
道アリ之ヲ高平隧道トスヲ延長七拾七間弐
分幅員三間高サ弐間初ノ山腹ヲ洞鑿スルヤ
岩理悉ク緻ニ走リ倍モ細木ヲ束トシテ立ル
如ク之ヲ砕クニ必ラス小片トナリ一大石ヲ
モ断採ル能ハス茲ヲ工半中才二ノ苦難トス
洞門ヲ出ツレハ左側ハ峰巖屏風ノ如シ頭ヲ
極メ仰キテ望ル ヲ如タスルニアラサレハ
望ムベカラス右側小川モ亦尤峻故ニ逐欄ノ
地ニ石材ヲ以テシ極メテ厳師ヲ用ヒス密
ニ危難ヲ避ル ヲ以ルノミ字四郎ニ至レハ芽
屋六七耕地ノ間ニ點綴ス是ヨリ西北ニ耕地
ヲ漑シタルモノナシ新道ヲ開ラカルル以前

No.15

ハ中野村本部路ヨリ四郎ニ到ル間弐尺未
満ノ小道ニテ人馬往カニ往来セシヲ以テ現
今ニ至テハ別ニ天地ヲ開創セシモノ如キ
是慨ヲナス故ニ近傍地所ノ代價ハ初ノ倍又
歩五拾円ナルモ今日ハ一百円猶賣却セス蓋
シ貴ルヲ欲セサルニアラスト雖モ甲ニ問
ヘハ一百円乙ニ問ヘハ之ニ倍シ愈ク問ヘハ
愈ク騰リ自ラ止ル所ヲ知ラサレハナリ而シ
テ字鋼屋字瀬沼並ニ耕宅地アリ部ヲ風景ハ
四郎ニ異ルナシ字瀬沼ハ古来一大岩石
ノ半腹ヲ掘割リ小徑ヲ作リタルモノアリ其
幅員僅カニ弐尺強故ニ往時人馬誤テ足ヲ失
シ数尋ノ間底ヘ陥落セシモノアリトス又巨

No.16

巌醜奇上下四凸充松其間ニ排立シ北方ヨリ
之ヲ望ハ極歌ノ山ニ登ルカ如ク南方ヨリ
之ヲ望ハ蜂窩ノ風ニ破ルヽカ如シ工事ノ
苦難又思フヘシ近傍ノ民林ハ松杉桶栗ノ樹
木多シ字埋場ニ到レハ家屋悉ク道路ニ沿フ
テ密ニシテ一小村落ヲナス是ヨリ上殿坂村ニ
到ル新道ヲ開キ以テ字多郡中村地方ヨリ米
沢ニ通行スルノ便ヲ得セシメントス而シテ
此埋場ハ飲水使用水ノ足ラサルヲ以テ旱歌
ニハ米ヲ淋スルニモ小川ニ下ラサレハ能ハ
ス又ハ清ヘシトナス而シテ字塘坂官林ヲ
貫キテ坂ヲ作リ板橋ニ到ル間田地ニ
土石ヲ盛リテ道路トス埋坪寸某一ノ労工場

No.17

タリ受負人ノ豫算意ノ如クナラス失敗シテ
走ルキノ亦少カラストエフ小川ノ流水遠テ
又茲ニ出ツ此中央ヲ以テ大笹生村ノ界トス
是ヨリ西北ニ生産スルモノ鰻鯉鰍石魚杜父
魚香魚蜆等ノ魚類アリ之ニ架スル小橋則チ板
橋トエフ延長拾五間幅負四間又小板アリ
川子板トエフ登一弐町余西ニ栗林アリ秋季
收獲多シ堰アリ井佐野堰トエフ幅負壱間字
代淀ニ当リ拾弐町東小川ヨリ水ヲ疏シ大笹
生村井佐野村入江野村平塚村ノ田地九拾四
町歩餘ニ灌漑ス蜆生産ス右折スレハ道路蜘
ルヲ走ル右両三ノ家屋アリ大笹生村ノ支村
トス井佐野堰ヨリ壱町四拾間ヲ経過シテ組

No.18

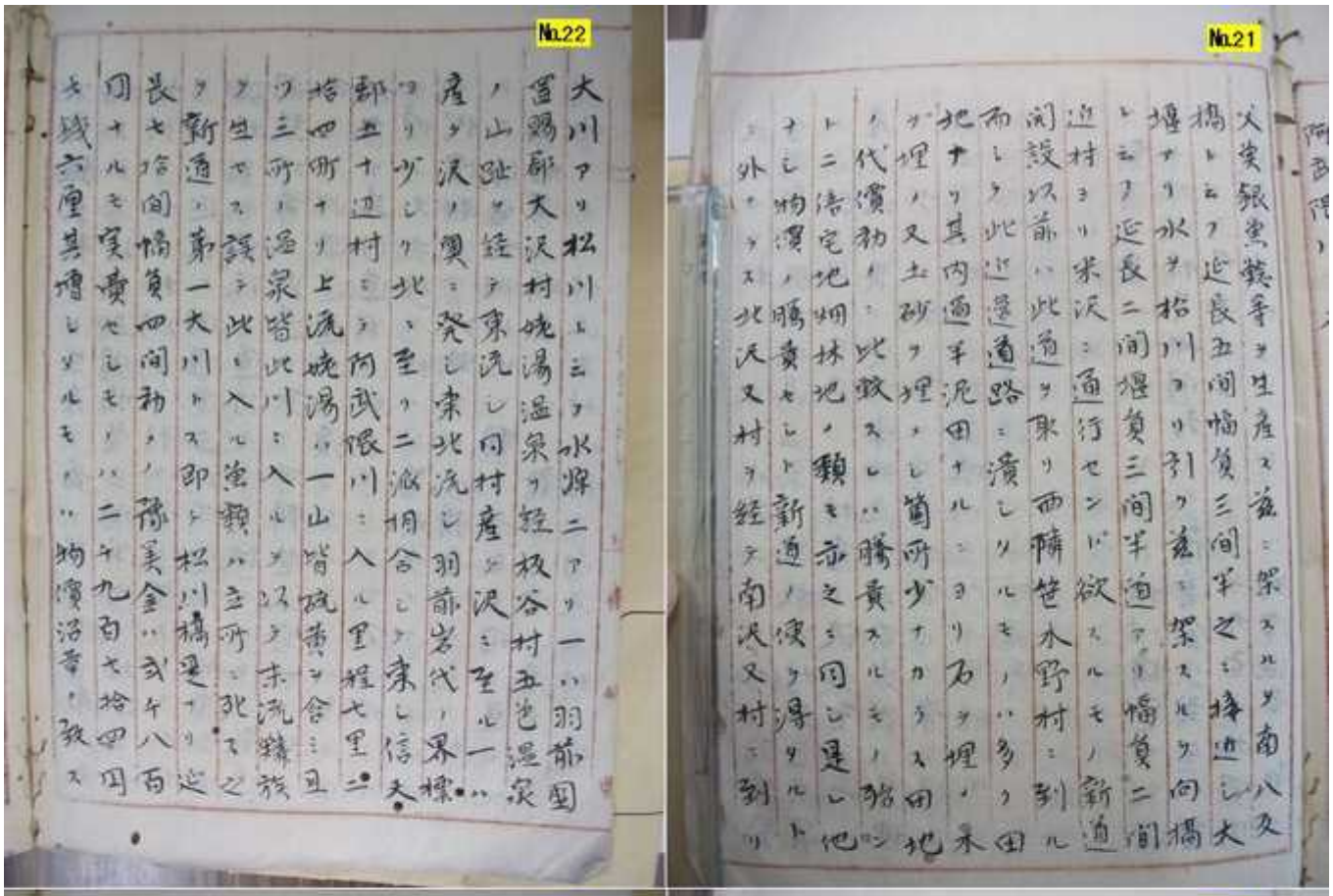
山官林ノ麓ヲ劃間ヲ二丁五町三拾間左ニ鬼越
山官林アリ其ニ預ル羊田鶴山ノ需用ニ充滿
スルモノナリ其松樹茂植樹又多シ為延文久
ノ度四羊田銀山需用ノ為ニ伐採セラル当
時樹林繁茂ノ際多ク松茸ヲ生ス樹林稀薄ニ
逆シテ少ク松茸ヲ生スル亦遂ノ減スト云フ
路傍ニ溜池アリ十六沼トエフ面積壱町三反
歩深サ八尺水源ハ組山ヨリ出ツ本村ノ田地
六町歩ニ灌漑ス又家屋アリ字坐頭町トエフ
初ノ道路ヲ開鑿スル頃ハ宅地壱反歩ノ代金
五拾円アリト雖モ現今既ニ騰貴シテ一百円
ト雖モ肯テ賣ルモノ稀ナリ蓋シ道路ニ沿フ
テ商店ヲ開業セントスルモノ比ヲ皆然ラス

No.19

ルヲキナリ横断シテ道路アリ其幅負弐間敢
坂アリ長坂村ヲ経テ茶沢街道ニ達スルモノ
都テ茲ニ由ル近傍ノ畑地ハ桑樹多シ初ノ二
三年前ハ壱反歩ノ代價四拾円ナルモ現今ハ
騰貴シテ八拾円アリ又林地ノ如キハ両三年
前ハ壱反歩ノ代價僅ニ八円ニ上ラサルモ現
今ハ已ニ三拾円ヲ以テセサレハ之ヲ得ル
能ハス路西ニ一ノ民林アリ字ヲ羽根山トエフ
高サ平地ヨリ三拾間七分周囲拾八町歩別
五町歩栗樹繁茂ス松杉桐竹モ亦生セサルニ
非スレトモ茲ニ羊ヲルニ足ラス初ノ官林ニ
シテ羊田銀山ノ需用ノ為ニ伐木ス殘松桐頂
上ニアリ明治八年中選禄士族ノ拝下ニ係リ

No.20

民有ニ帰シタルモノナリ是ヨリ福島ニ至ル
ノ間道路屈曲スル拾壱丈一ノ如シ且平坦ナ
ルヲ以テ此道路ヲ作ルニ当リ笹谷
村ニ役場獄署ヲ設ケ懲役人ヲシテ工業ニ従
事セシメ微吏之レカ督督ヲナス橋アリ北八
反橋トエフ延長四間幅負三間羊之ヲ八反川
トエフ水源ハ本村組山官林ヨリ出テ笹谷村
ニ入リ南八反川ニ合ス凡壱里水清冽ニシテ
獣鯉鰍鰌等杜父魚其他赤魚蜆等ノ生産スル
モノナリ是ヨリ凡四町ニシテ笹谷村ヲ相隔
ツ則チ百二拾間許ニシテ南八反川アリ源ハ
西北大笹生村鉢森山ヨリ出テ東郷田村ニ入
所武限川ニ入ル三里二十五町水清澈鰍蜆杜



No.21

又安積郡等ヲ生産ス茲ニ架スルヲ南八反
橋トシテ延長五間幅員三間半之ニ接続シ大
堰ヨリ水ヲ松川ヨリ引ク茲ニ架スルヲ向橋
トシテ延長二間堰員三間半通アリ幅員二間
迫村ヨリ米沢ニ通行センヿ欲スルモノ新道
開設以前ハ此道ヲ取リ西隣笹木野村ニ到ル
而シテ此迫道路ニ潰シタルモノハ多ク田
地ナリ其内通半泥田ナルヿヨリ石ヲ埋ノ木
ガ埋ノ又土砂ヲ埋メシ箇所少ナカラス田地
ノ代償初メ比較スレハ勝負スルモノ路ン
トニ浩宅地畑林地ノ類モ亦之ニ同シ是レ他
ナシ物價ノ騰貴セシト新道ノ便ヲ得タルト
ニ外ナラス北沢又村ヲ経テ南沢又村ニ到リ

No.22

大川アリ松川トニヲ水源ニアリ一ハ羽前国
置賜郡大沢村姥湯温泉ヲ経板谷村五色温泉
ノ山麓ヲ経テ東流シ同村産ヲ沢ニ至ル一ハ
産ヲ沢ノ奥ニ発シ東北流シ羽前岩代ノ界標
ヨリ少シク北ニ至リ二流相合シテ東シ信夫
郡五十辺村ニテ阿武隈川ニ入ル里程七里二
拾四町ヨリ上流姥湯ハ一山皆硫黄ヲ含ミ且
ツ三所ノ温泉皆此川ニ入ルヲ以テ未流鮮族
ヲ生セス該ニ此ニ入ル魚類ハ三所ニ於テ之
ヲ新道ハ第一大川トス即チ松川橋是ヨリ迄
長七拾間幅員四間初メノ賃美金ハ弐千八百
四円ナルモ実費セシモノハ二千九百七拾四円
七銭六厘其増シタルモノハ物價沿革ノ致ス

No.23

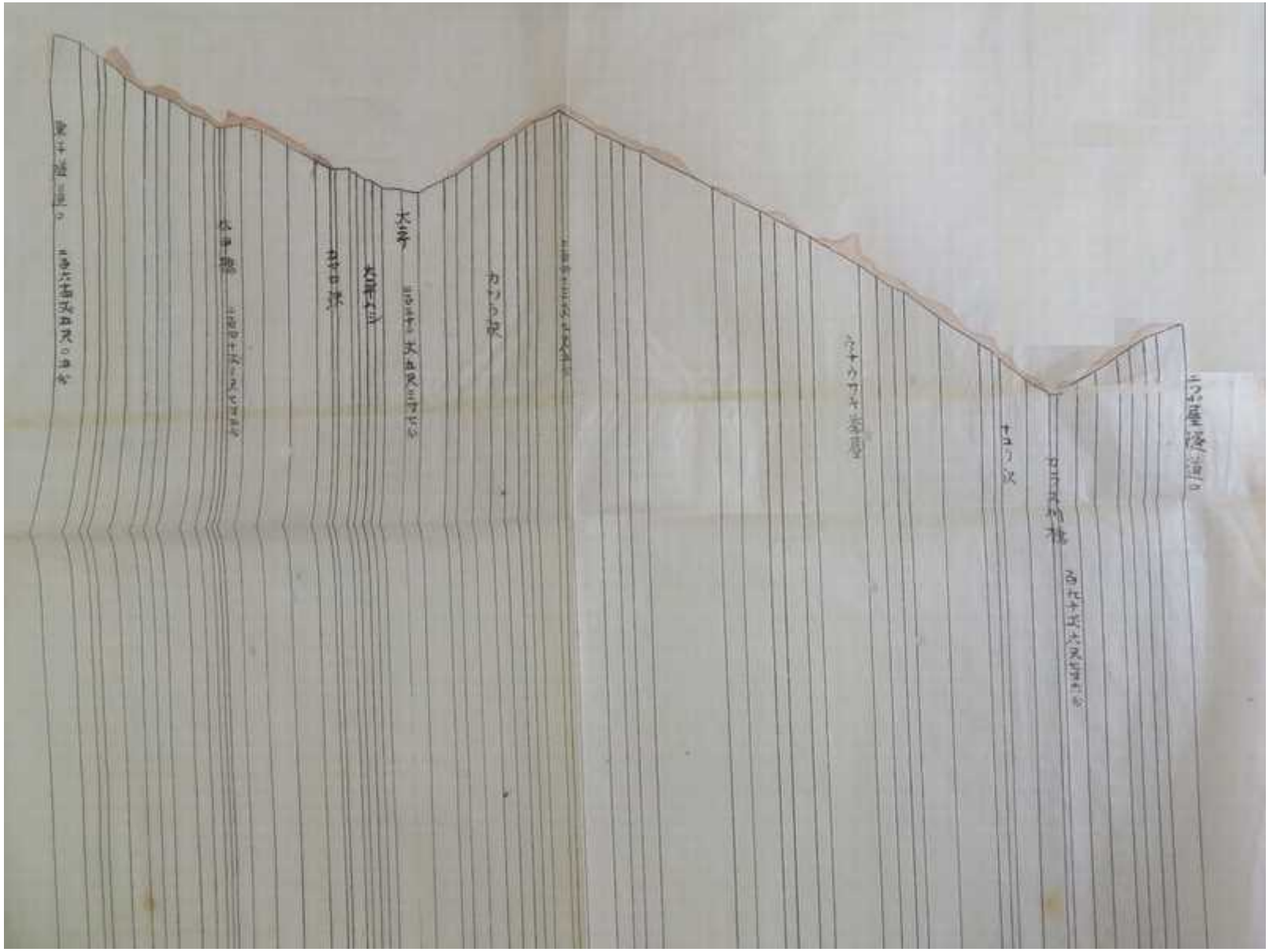
所又止ヲ得サルヨリ是ヨリ西ニ距ル三町
許リニシテ一泉アリ柳清水トニヲ隣村泉村
佐藤柳次郎ノ発起ニテ福島野半沢喜造小泉
平兵衛等又之ニ與シ明治十二年五月新道
成ルヲ以テ此水路ヲ道路ニ穿チ伏樋ヲ埋ノ
以テ福島街ニ引カンヿヲ請願セシヨリ大
ニ之ヲ賛成シ本縣九等属植田藤作ヲシテ地
勢ノ高低水量ノ多寡伏樋構造等ヲヿク計量
セシノカヲ添ヘ以テ遂ニ功ヲ奏スルヲ得タ
ル福島市街二千百五拾五戸日用ノ飲水ハ總
テ之ニ由ル茶合村ノ曾根田村ノ界ニ柳川ア
リ笹木野村字曽場ニ於テ松川ヲ堰引キ水清
ク流レ数ヶ所ノ田地二十六町五反二畝

No.24

廿八歩ニ灌ク之ニ架スルヲ柳川橋トニ延長
二間幅員三間半大笹生村ヨリ福島ニ到ル
間道路ニ沿フテ居ル古ニルモノ熙ヶトモ
未タ橋ヲ建スルニ至ラスト雖モ家屋ヲ設ケ
ルヿヲ希フモノ比々皆然ラサルモノナシ則
チ清麗境ヨリ福島ニ到ル間大略ヲ述フル
ヿ如斯

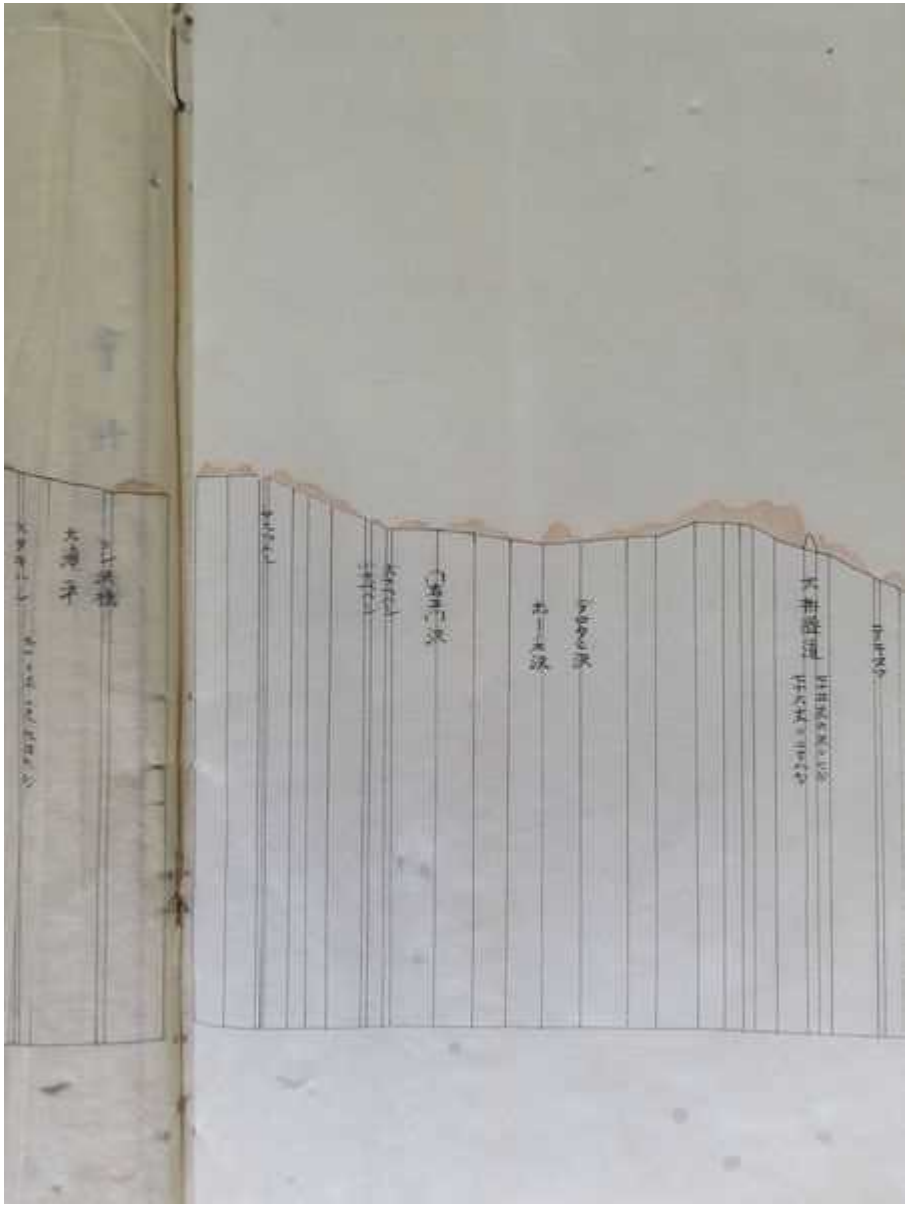
（福島県歴史資料館蔵）

別紙資料－3　従福島町元標　至栗子隧道口　新道高低実測圖（縦断図）

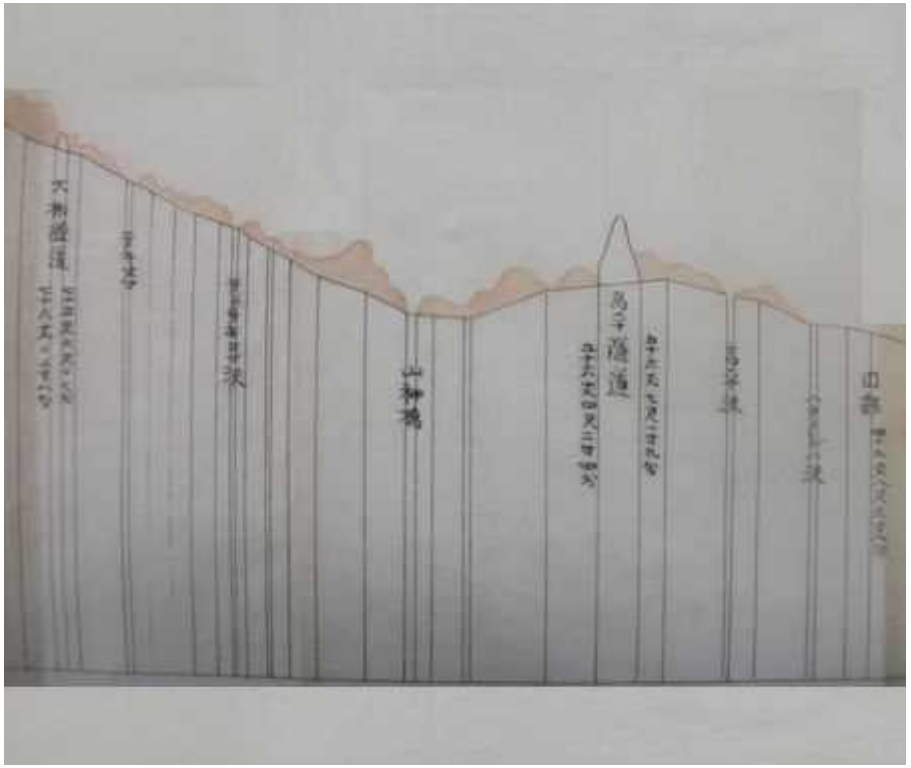


縦断図部分図-1　栗子隧道（福島側）～杭甲橋～太平橋～大平（大平峠）～烏川橋～二ツ小屋隧道山形側

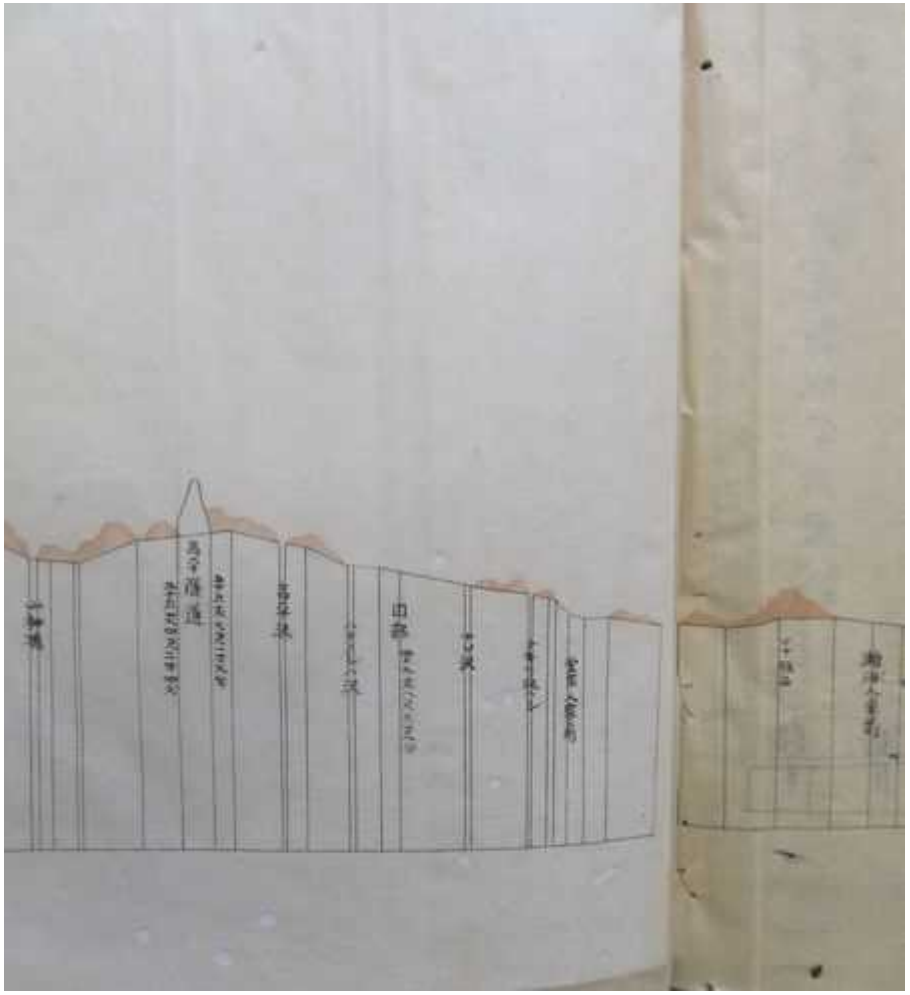
縦断図部分図-2　　二ツ小屋隧道～オサ沢～新沢橋～日向(暗隅)橋～勝地梨沢～西川橋～胡桃橋～大滝橋



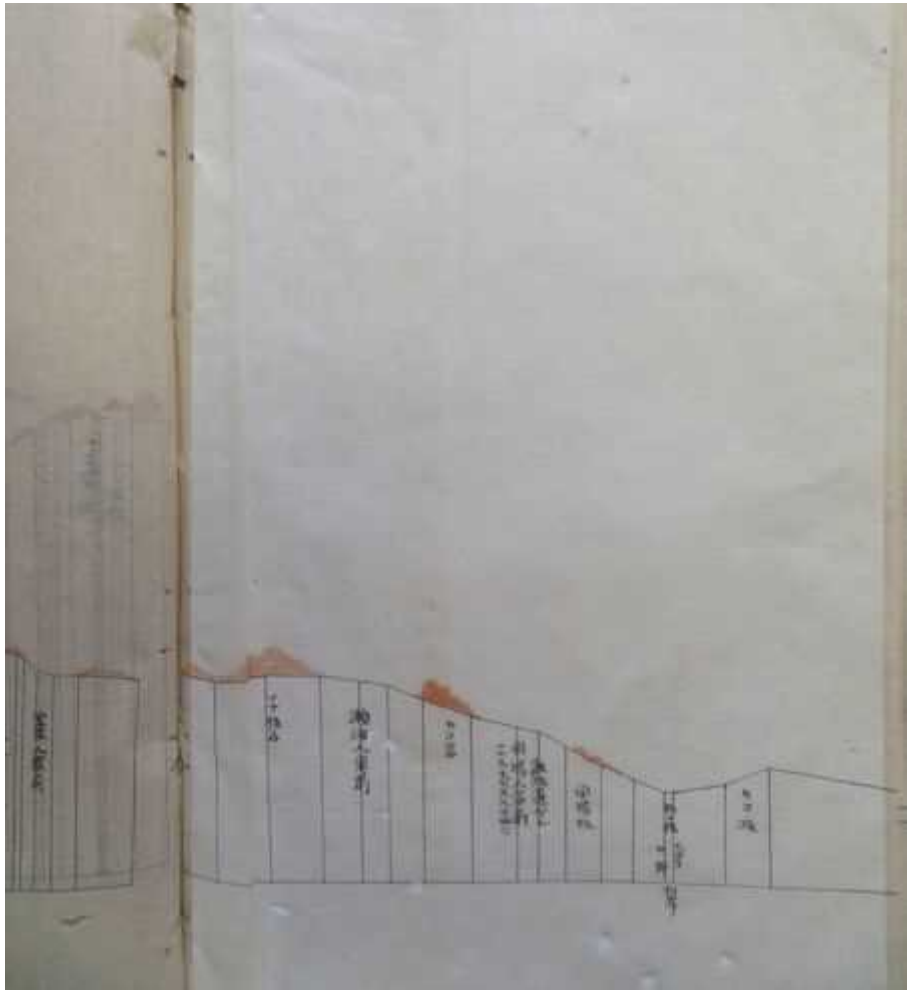
縦断図部分図-3　　大滝橋～葭沢橋～ヤビツ橋～大鍋橋～大桁隧道



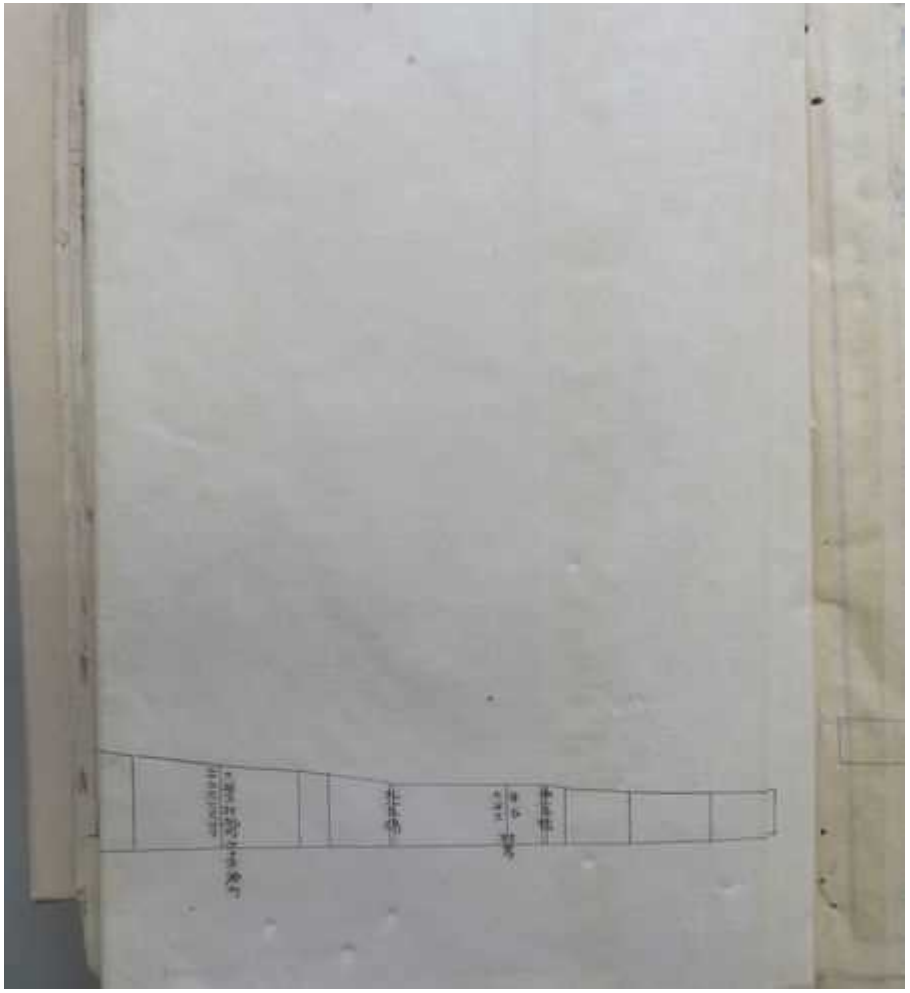
縦断図部分図-4　　大桁隧道～山神橋～高平隧道～円部



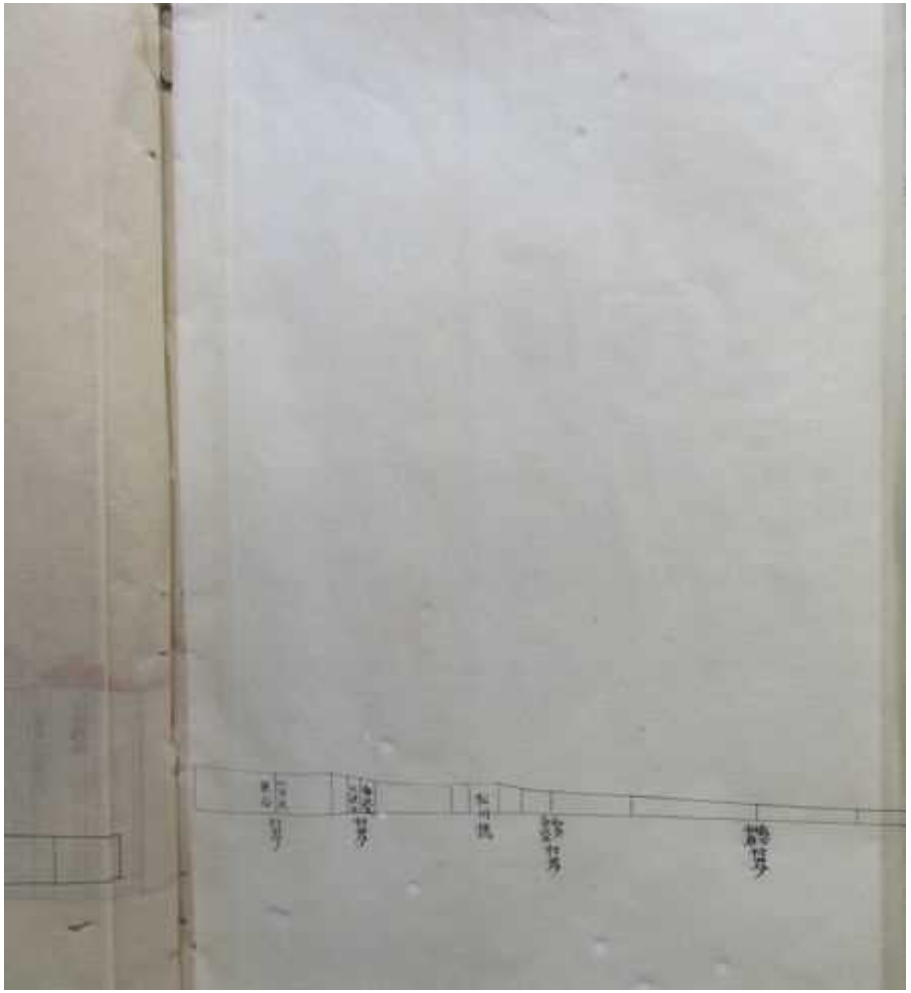
縦断図部分図-5　山神橋～高平隧道～円部～堂家人家之前～瀬沼人家前
（銅屋）



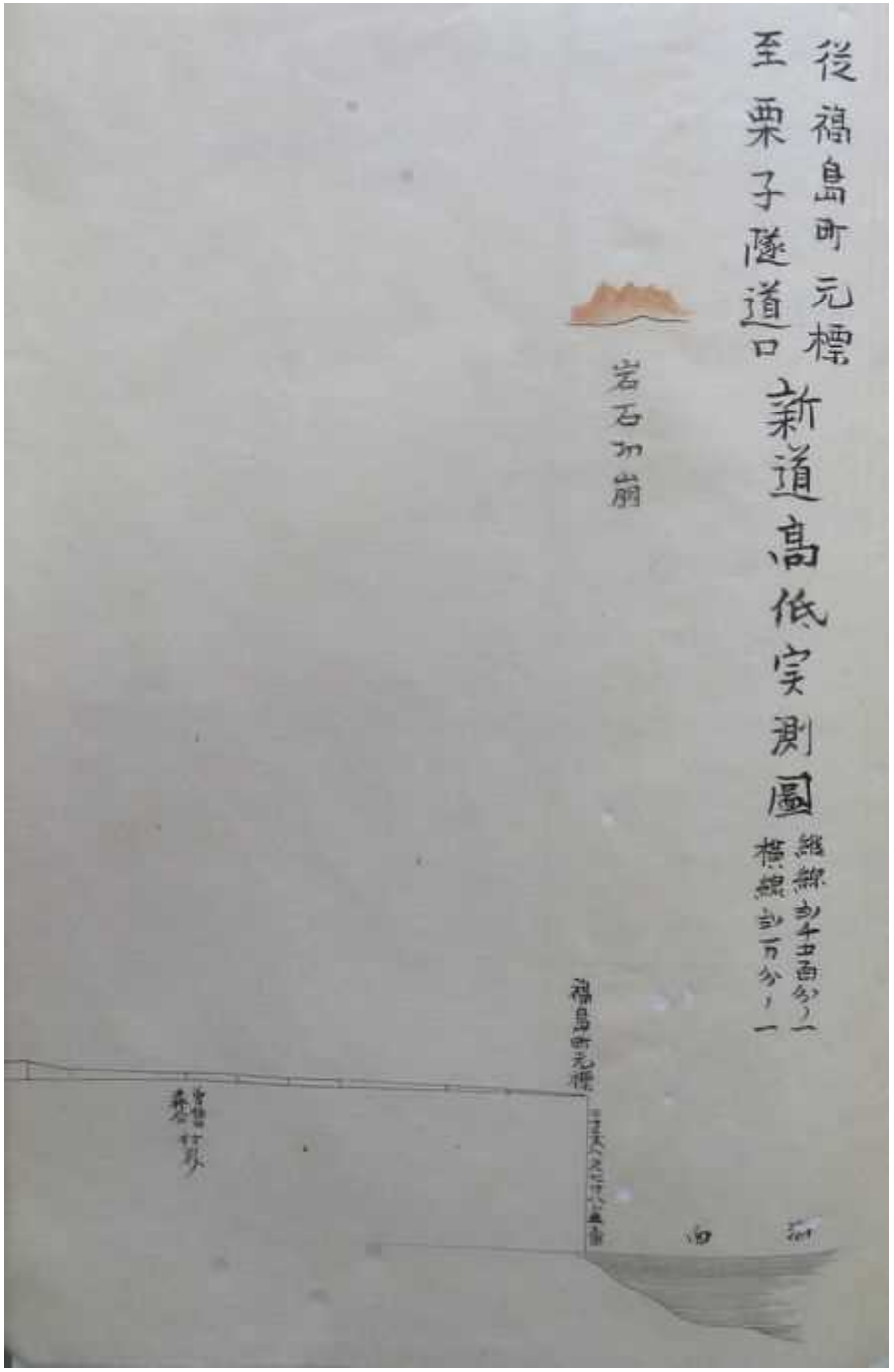
縦断図部分図-6　堂家人家之前～篭岩（カコ岩）～川子坂（カコ坂）
（銅屋）



縦断図部分図-7　座頭町～北八反橋～大笹生・笹谷村界～南八反橋



縦断図部分図-8　笹谷・北沢又村界～北沢又・南沢又村界～松川橋
～南沢又・和泉村界～和泉・森合村界



縦断図部分図-9　　森合・曽根田村界～福島町元標

【参考】

日本水準原点　　（国土地理院 HP）

東京都千代田区永田町１-１国会前庭北地区内（憲政記念館付近）設置されている。

東京湾平均海面を基準（標高０メートル）として、前記の標高 24.5m地点に明治 24 年（1891 年）に設置された。その後の地殻変動により現在の標高は＋23.390m（平成 23 年東北地方太平洋地震後）となっている。

（当該高低実測図作成時点の水準原点は不詳。）

縦断図の元標の標高

二十二丈八尺七寸≒69.29m

※　国土地理院　１級水準点（福島市仲間町国道４号沿い）65.557m

縦断図の栗子隧道福島側坑口の標高

二百六十四丈五尺五分≒801.45m

※　筆者資料　福島坑口標高　887.4m

（『万世大路事業誌』より　福島県歴史資料館蔵）